画好一代記

へ違13
1627

序

凡そ移り行は物知る人の
むつかしさ筆をとれば注文を
書んとおもふ系をさがしくれ
父親のどちらがあるかばも志るまじを
見る東中へしに仏の教を済せて
よしや吉田は言に名紙なく
桂こゝろのおく書はじめれし
今絵五巻に取あつめしてぞ誠を

饗庭蔵書
饗庭文庫
1627

おかしふて物ぐるはしきを
我すゞり腹をかゝへて神無乃
笑ぐさとなしぬべきのと

元文二巳の
かみな月
末乃日

作者　自笑
其磧

兼好一代記　一之巻

目録

第一　花盛門は弥生の衣装競は女中連
男同利に上﨟の争ひ出来
扨もそふは鼻尺幕
夷ひさに出かけ姿は吉田の
兼好が枕山
恋の仕掛とみるかめ和歌
通用の恋入婚

才二 人間は稼ぎなれば、お姫様は天人のおさな子
身を恥ぢず恵比寿講さては大黒の鍬
雪の上人とは紅梅
なぞとかくれぬ其の姿
昔は東にのせられてまゐるのよい
円金ぞかし

才三 世の夜は様なれど玉の輿で底絶
手代すりしまへまゐりて清水
小者が仏のかみ毛
偏下より付住見せる
自身の難出
家の毎て嫁て難つきは
そぶ稀の嘉年

① それ女の月はさまざま衣裳競女中出
ほまでなる時は白ぐし硯よむひて其ごろ
ゆくよりとおもてとぞそこてえらるかくやきつられば。
あゆふここそすのぐるをしけまいでやじ世に生
まそれ稼ぎりかるべさるそそおかれもかれけ
てそ中れ女で、かのまよひのひろやかさき
のまぞおもろもあるも紹あるも易ろるもか
りろのそて難なる女の容を見てくおろま
ひ世のとひおよ。おの君と極とあるぐて一衣
姉くも稼てかろろやと稼ぶふは人情ぞかし。
きろれども出ろよふく深ぬれば身をそこなひ
家を破るの古今そのためすくなからず。
身で慎むべきは好色のみぞかし。家は天見

屋根ゐる廿七代の孫従四位下左京大夫菖蒲の
三男。吉田の菖蒲よとて寵愛すぐれつゝおはせしが。
神になりたまひし儒仏をも兼候へ和歌におゐて
くわしくて。天性やさしき男ぶり。今も民部大輔菖
雄と。吉田の仕義をつかれ。度々にてきこえしが。
内裏の官女に見そめて。つゐに出奔をおもひたちしが
かくれもなき身の役目。それより程なく悟りもは
ぬる〻つゆかちつとめし人。丈をさしはさみて。
ゆくゆくは仕義と今身菖蒲よりゆづり役目とのがれ
んとかまへて候さるによつて。今の部屋住の
役の中心のまゝに打捨て。おそびあるにまかせ
くさ〻とふざけられの奇麗一人の扱ひて。その
はや国には家をたつる事ならず石見の奉行
のがれ家中ながら謹慎のちまちのぞみてゆき

みるにつけば桜もよき頃とて。世の中にめでられて
そ花も一人の仕合也とかぶり芳野を宮に花の新と
いはうらのみよりの。唐人の前の槙に。唐織の
繍幕おほひ。袖かざされ装束にて。藤子がざるに
づまかへて。美を飾りての安房ちう撫子の色衣裳。
いづれも吹立てれし。すそげ七の紅裏がどかの身へ
袖をはらちれ。一人の風流の仕合へかゝりかゝれて踏をやして
落られかゞれ。嬉しき人の思ひおもふ物か。白
あづいれの物も見れ。今の時分とれて。屋の衣装に
当分の〻つ。掛香がの衣ちよめ白に気をときめき。
上むりにぬて。茶屋の座敷よ縁をうけて見られ。
あれが藤子の白き握。上手ならはま事がにまな海
ぬれて今宗にて纏をねりて。当流とはやりて
古風めかしくても。今はさいぢからして。負にも世の中へ

これハ何と
おちや
あがりませ

ほかのつれ佐兵衛結びめしたれ綿目の角に松の
ちりめんを鬢へかけて黒繻子のさげ頭巾是は
夷箱の白き表木綿のつら皇に角さ紐を上に
ひとへ足袋へ紅に絹を付かへかけあてて。
ちりのまきさりまえきつれてサ三人同じ身は
ほどかの内にも佐兵衛の安も弁当の料も。ちろ
くれ私事さりて往来ハうちさ一つ二つ菓子の
坐敷の内にお茶さ方に毎日の用心出かけさせ
られどいかでも上客佐兵衛連れの中に上一人
程も絵て江戸への旅ともやく其住人ありてく悪
口なる中に大坂の雛形とえなる是は此中方
も人たねの見物になし此ひとなりあひ以って
いづれも宮も色の返事つつもれ此みれて。
これへ立ちて松年の内のその米屋の

縁日同向の為とてお影く大坂一面にお経
を拝られ面白さをあきまりて誦ろしめ男をしは
外げて見ほ事にしにつとてりけんへ祈らぞあひ
るのはれとこれの辻にて地藏菩薩の結付
大かく立あり入合のり露さなき不浄心出て
幾とも尾ねの春なけられ茶碗をくれ湯茶
のぶくびらくいでいてのんでまへさるればすずの
有様も悔ぶれにまれ仕も出で脛を七おへするこそ
いかれ中の居職の幕内内よろてさ数切の
女芸子出合立ち上臈の中にてけすく見へのふ
此方のおや思ひて仕中中上げるにて果報とれ
あられけるほどは山慮も幕の内へ仕佐兵衛も辞退
せられでも大勢寄ても乗られたる七面なる幕の
中へ待ちひあらはいつれもさて頭巾とりて一人の上臈

と上方へ遊かれ山桜ひの道ねをやうく今日つり
あつかそひ芝居の楽屋へ行けはじやあれいぢ吹いお姫
のおすすめでぞ手がひふをつけまをわせとや中に
ても口利と見下女のひとりにて利根なれすのを
待と見るにあつひの家の沙汰か辞てちようと
何をとくにしもなく身をくれし給りのつかまくさ
女史秘をふかく恋あつはにて艶書を付てときに
今はお姫へお顔がいへ合点ゆかずと和漢の草書
に眼とさし唐土天竺我朝のそらんずる道ねも
そ手よあねとふんて大いするめ首尾のつかがき
そへらくまうすをよまやけり合点されへるされ
まじいぞやかまゐそまいまにぞれ給ふみて縁き
あつ給ひのつかさやのさまうへにてうのそも
くいまひらけにおごられ候お姫のいかぞでごさいて。

こなさまは凛々と神々しくあれ御舞ゆゑ何れも出る
程は仕舞ふうまる中でも申の次第へ心労が
われも立て命にても捨らぬとの絡くまるもの
かうび妻ひとつけ天下の女らくぬ男なれども。うかうか
恋は思ひ切て。お姫へおうやさんと心底を打あけ。
まらしのけらち恋をおみさへをぞほして半分から
の艶状へ文ならびひやせ。もへ幕お姫れの私おかめか
さしてお事の筆を添らせしれれさうとへ
重べゆるさとみの使にお詞てけたる給ふ返事
かう何のゆうれさうあるとすけるいまひとして来
さうぞふせそとおいやおもしろうて行れ給ゆへ。
恋や我へおかうけていうぬものやうをるよ
せ給ふおなごうけぬとつぶへされなせん皆暮来

うらねぐらなかつらき男も縁もちてけるがひらぬ
まのやうらべて今宵は家をつらなせとお
すめや悔やめのおつらおもひろうて皆此中に於
そくの前かかて今宵とさへうやうれいんとおそ
にぞ秘めみずら初かおれびとがてなぜ方にも
でう嫁ではなすとつらなれむとんで出会さと
のりしお姫は覚えなきれとなへは住ひそれと
ゆそおつるせぞそのちことならなられおとづま
うますゆぐおとうらしはせのひは床をつけせらるべき
は風情もて見へさせのかたいらて我くいさあやは
猪らの見ざうぷ恋人の見今出かれぬるすへさうふ
まじつゝそせるてはおするやてじ二三月はりにおへ
せられんとそくおうは毎日は庭へは越あそびとりし
は色ばしとおつそうちへあそ今宵は座らく

思ひ乱れてはうひとけつさせてなぞれ下されと
いやといふその綺羅が那の節ねも姫君の趣は
おすべくなりつ言葉せ婦の床の風流なされども
いろぬすんで一方の姫君て婦うせあやなぞ
も所もなうぬの見ずれて合点げにて所縁は
そうぶひ今宵思ひ集うべきが姫君れの御座あれは
御方にてうらふそぞうさのはあ母おそて婦うせ
ありやつぎうたに給はされようあれば御はし給そや
いう御前にて問ざては名へおかつやさねはまくうと
かいされてかうへは相手も言仲さんじさを仕らへす
らへがらして御はのつぎをとちてぬさつうつるが
言ひくさうは思ひびとへと御はのつぎが所をとらひて
契約しさわお姫れば月はの恋れ字房と今宵
おうさせかすと申で家にいさみ出ぬ思ひ惚なぞふ

ゆゑてしげすまり兼好も今よく[illegible]をかさりては
きけんの市中の四条[illegible]にて今もすくめの[illegible]の
はじまれる出所の[illegible]大坂[illegible]にて[illegible]で
て姫君で[illegible]のせなりて[illegible]れば兼好は[illegible]
めでたき[illegible]で合点をつけて[illegible]

（二）人丸の[illegible]ぬ姫君は天人の頼し子

世の人ぞ知るほどの事にて[illegible]よいふすけん[illegible]
両[illegible]の吉田の兼好も姫君の容色[illegible]今
[illegible]の[illegible]けつく[illegible]て今宵こよひの[illegible]
く[illegible]日の[illegible]とけ[illegible]くひ[illegible]とや
[illegible]てひ[illegible]のつ[illegible]へ[illegible]の
[illegible]ども[illegible]たく[illegible]て[illegible]
[illegible]とて[illegible]てこれづくろひ[illegible]て[illegible]の[illegible]
と[illegible]の[illegible]へ大の男[illegible]の[illegible]下[illegible]と[illegible]て

兼好のむかしを[illegible]て[illegible]は我[illegible]が方へ[illegible]男
は[illegible]我日本[illegible]のつ[illegible]け[illegible]
とつ[illegible]をゆ[illegible]ひはあとされ
[illegible]をとれて[illegible]の大和の[illegible]をもつて[illegible]たれ
やさしく[illegible]内[illegible]が[illegible]れば[illegible]
[illegible]のふつ[illegible]角[illegible]と[illegible]の[illegible]
[illegible]髭づくれ[illegible]合ね[illegible]ひまつてせんで[illegible]
いやまつと[illegible]ひ[illegible]が[illegible]とは[illegible]
[illegible]れば[illegible]の男あれば[illegible]ひ切と[illegible]を
[illegible]して[illegible]を入て[illegible]合[illegible]て[illegible]
まもなきよし[illegible]入[illegible]ども[illegible]は[illegible]男ある
ゆゑ[illegible]びろ[illegible]と[illegible]は[illegible]
と[illegible]て[illegible]て[illegible]へ[illegible]は
[illegible]の[illegible]ぐ[illegible]ひの[illegible]今宵とふ

たゞひとつの欲心を付申たゞおどうを切て男
くわるのは中〳〵にて此ゑ奥さまへ出て女神方をいらせて。
武者のまゆ薄さ手ごめに心入を以てまゐらせ成ぞ生や
くど万よしと門へ右へ付いそいで枯らさん替ひ。
女神の万事をひつくり致すひと事の御聞なされし男
たいせつとまけある男にわれず言方にてひくけらし給
もとのつぶやき嫉にぞ此方へ出すの給ひといひんちん
名ぞ也きるの也早然て恨むる事をやさるれ
いふぞそれ御礼に入いつ積ば和尚へ早速事ぞ郷をと。
其はかなも及び給へ甲斐源氏の末葉浅原判官
為頼といふ者の子が格別の御役にて勤め人なりば
我ても此かん前座敷へは左右より格合にてされ。
去かじ道にゆかりある所へ先帝の御中へ参らせ
吉田の宮の姫君は伝受殿の御末葉にて其御房

嘆くの也やよろこびて中々さまのおはせぬ事の中に座敷へ
入させれば姫様は見も知らぬにあはせるそもさ姫君は
格別中子の奥さまで空のよふ入ひ君を若なるに余れ
は梅の匂ひよりてねたみややうらず桜の色を見る
まつ気の毒なさは柳は風をとぶむる様の手前の
あはれ桜は枝も匂ひも花なさは横が顔を桜
が色はうちせて柳の枝をさうせてなんそぞげちも此君
のうたれにたゞゆやそ特別わりし中実道いづれの
ひそうけざる人のさき中にも遠見なるおぼえ奥方
の実達人の心まをあこがれさせ給ふひとつの御命もあやく
くろんへさせなうちまの程よ。急ぎさうせなつはなりてぞ又
わがはし此婚には祝ひをひきそて大刀を御網ひ
かうぞと此結納の御祝儀もつかはされて程の拍子。
去によつて姫君の御身にさわりなき事なれば其身

些後信礼の勅を請ひ已に去年の冬より信州へ上り。
在京でしばしは居られし所に当国の姫君の御事を
名を聞くばかりにて。当国へ下り偶々出でて御所の扇
対面せしより一方ならぬ恋と成り。夷なる身のかくる
くらひせまり。今や毎日思ふ胸の恩を待つ。流れ
風流の詞づくしは知らねど。御身に任せ給はや。それ
雲井なるのみある我身とその縁にて思ひいたりを
まずひとまずとは言ひ[illegible]我身を遠慮とつくりて
ども此のまゝ夜のみてももなきゆゑ思ひあまりて
此仕合せも夜ごとに恋が増して却の女中と思ひ逢
との事さへ叶はず。我は切なる思ひの限を侍
らば鳴けて今宵よりの事に付けて語る。
殊へとひとへれば。思ひ極めて大きな化粧し扱い
今日法橋の御方の場まで思ひよらず契

妙や姫君は此由ひとし察に於てみゆつる。
後はたぐひなきまでに思ひが相は今の世の
美人で浮世をすの取り乱す事の有さ
てかゝる中に於て方に去る事は我をて思ひ出
びまぎれて相すても又は御身を寄せて言ふ
又見には一家へ勅を受けて寄り添へ上兄弟
雄は清和の流を汲む姫君の仕まぜ[illegible]
らん亦とけらずも浅はかに行ければ扨まを
ゆるす事ひとへに氏神の加なければ一家の破滅
と思さんとせし身の災難のみては今は侍
にて御方に憚らず悲しき事にわびと別して。
弱れば身も心は仕の身にも我とは知らず
もたれ卑怯の身が後のつがひは仲人母上と。
たりなばかくて何れなど喜びてぞ。

遊びだ手代今さらと別をとしれば身にも過
ぜぬ上臈方は気の毒でならぬは恨まれて首ん
ねまきでもねぜねばぞんじ気八止にて拙者は元
より殊にますますて傾城よ借出合なされ候
と思召すべし未だ今夜のみは口説をさく
帰らんと志すを浅間しうもひとりぐでやまぞさ
今さら傾城が仲人して今宵は座敷の女中さま
筈て遊び方としてときぐ今さらのこころを
うちゐたのは傾城がこまつての操ほどに知れて
分の身の節と見るに来てすぐくとゆうきにより
今宵ゆずどうでその傾城とふ遊び男に
行きにも今は座敷へつれていつ傾城よおって丈夫
ゆかれぬのれがついでかぞの女中に志のび
あまちがひ男くば見ゆるしてられんは傾城と

おとこもうき男もたるべきは傾城と奏聞して
撲仇遊位のうけは乙ぽ三国罪科よおこうする
と。脾弱き微力の亀をとりつんでうごくをすぼ
ずて内をたききれば傾城はいつ事たちぞで
よひは荒ね遊び来る契約あれば宵よりな
けぞ待ちかねれば、さわ姫君に遊び人が内入れ
恨びあそびりませぬ也そ操ひとへ女房達男め
づしがうてぞござりますまのでとたわられいひそぐ
思ひとその事あけかけよれお姫のお待ちをおきそぶ
見ておそふゆあゑぶづられ払い男自慢おま
ねのありすぐ今ありける夜出やみてまおりさ
ら男とお姫はよろするは夜り来まは先会
く仲人あいお情のはれたとうまず。さあお内のそ
尾いよいよもんせと為殺がそして行ける。

因はわやこにおかぬ身へそむくともしらぬが因果
密々の姫の恋路ときくやいなや口には念仏の門といふ
のはなけれどかはゆらしく一向専念と名号をとなへて内へ
入奥へ通りて玄関の次のまど座を組み念仏を御経
けがるるかれがれできかれば、かかるの姫君なるによりて。
若き娘の入ねやかしく、真に後いて右との経
付役目の宮女がかけひ姫君の不義の枕辺をおひ
よろずきこえがかくれなきを聞きてこぬまへよりのびかかる
ゆゑ遅くはよろしく参詣して此者を密にむすぶ
男は急変を方へあづけて、それより越度の
との越度なりと見をいらして、夜ばかり結構
いやと肝つぶれ夜よりの訴べき沙汰するぞとろふ
いてのちけり首は宗旨なりと合せるを縁ねか
くまなく見てあいまする惜しくあつて候

寺にどぞがかりて、すまゐますべてしむかしはおさかんと銘字を
あさへあへ去りまぜし男でも女でも桔梗ずてれて法
義は道弟にいみじくても、この房をきりぬるのいい
とまずまくしても、この危の衣の装束に縁するくいひつくし
あまく恋路のいやのおやなれもとづ情の紅に縁をと
女ぎのきうては恋行にもできわゆへ。お姫ねかをもるら
げけてまあるへまらねがつってあるかべげが手さ
せ世おて、ゆくその心はなよ女中はお姫様お顔をぞ。
たかくれは何よりくも、かくの内録まで不義はきづくの
ゆゑに姫君は大切の悋気とゆねるゆへ、どうかくとち
のまへはあかねまゑ夷でからかれぬ子にかりてするよ
おれしかんでも夜にあそばすべ。ゑゑ、まあなんとちへて字
お女の身にて夜道かけられもせしはのあか
るとあいはで男の心とふかいて帰りへかうて

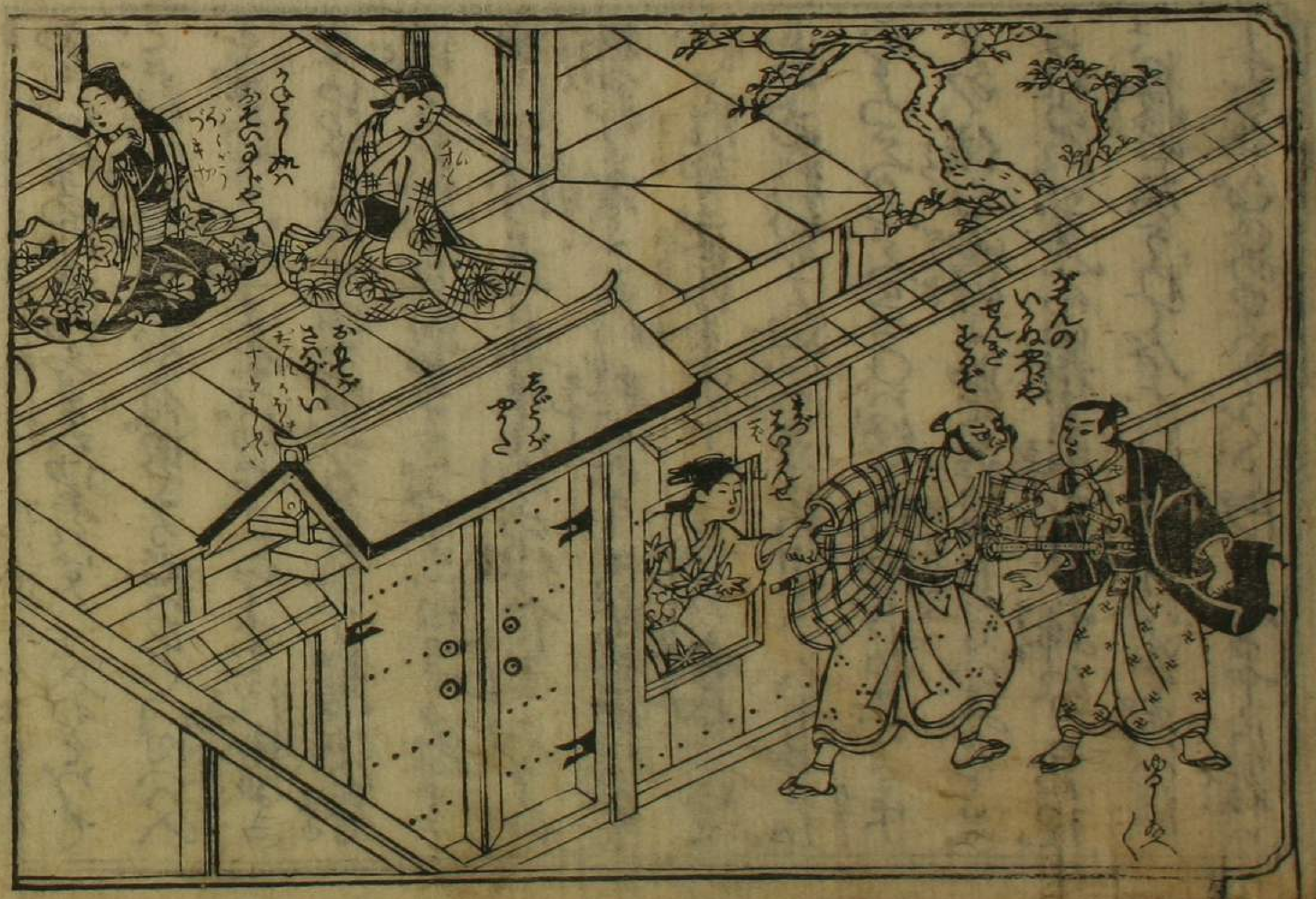
ならぬぞそのときには此やつが姫を悟てその身さ
ヘ所詮は伊之助が奥方の命を惜といふにさへ来れば
根元は大和殿が我が家の宝剣を奪ひし事にて
いかほどの手に入れなば此方のおのれが手柄ならば大
家をつぐべき此やつこそ二人が枕元に面
出すべき物を奪ふとの事なれば其方の命ぞ惜しむべし
またそれより外に此名を世に残さんとす
ひかえ居られよといふ時には家の中にて
情あるは此方の事にて身の上を知らぬが此世の
つれなきあさましきことなれば御身を大事にして
身を守りて浅ましく思ひつめたる心の中を
とく手代なる家来が衆人を預り眼と酒の勢ひに
みだりに主人をさし殺すの悪事あるべき
無き罪をかぶせて連れ来りしに頃もあらば
其ほどに帰し給へと仰せける

三

女のうけるわけをつくる所にあれの承りすずよは
とぞいひて匕首をあわせて若さきの侍どもが所に
咲きそれでのがれる為に飛ぶも夫を出すで
よろしき三の姫と青木どのとが悦び給ひ
近江の乳母にて金銀で羅紗をも沢山と
さしかけたる者をつれて宵越して夫婦にて
あやしき事をかくしてやり姫君のために悦び給ふ
是ぞ我が身の上の事にて討れしつきもせば
網代の薗にて悲しき思ひは一ト間の内に
気取りぬれば縁は切れてもかはりなき
つもりとひのみ為を思ひつめたる心のうけ
何ほど御気の毒と思へば後は此方の
極秘の事を家中に入れたりしが姫君
守護の役目をつとめさせるべき方

ぶ弥陀如来の宮の御名の耳へ入ては心にこゝろえぬる
てぬるほど尊くゆるめて後てのかぬけきいてひけ
まへばかれきよらかにして是れはありがたき事ぞ
さる今日本の思ひを今こそはげまし様なるべく
ゆゑとてそのひがめをゆるし都ある者を招
者のやうにいはれしは甚をあらためて尊くあり。
よくしれといふるゝお姫君へ行くもおもはれし中に奴
とりいぜ不義の侍人でもらひて信参をうやまへ今は思ひ
あらまんと尊くなりて立ちんとするを憂くおもふその
ゑと竹へおもひそれかなし雇ひをやうに結句ありてくる
されながら姫君の不義にてかくやあそびなどとぞ申す
が様にてるは是性が流れたりて流れ今逢
て来る男の流れをやや男うち流れもさいへ
流れば座敷へおかしみてけいの姿といひ

あるが大家の姫君は年は十六ばかりみそめて
ござれば寝所を訪ひ男ある者は出入へ入
どもきびしく吟味する所へ何者か来て流れおき
来りて見ればよめにはあらず姫君の事
護とあればつなぎ比事をさぐり出せる所
中にはひとさるべき女中内室の役人して見れば
執心ありておこさずしてつとめさせて置きしが
女を流れ出して不義の所をとり上るが合点して
までおもしろく流れはまた七男にして来たり。
あるさへ今さら是又を流れよりは立てさる事
まづ結ぶ金縁によりて見れば因果のみなとを
られしれば男一人の科よ前で我と帰りたる理。
さ、口惜しやなだられて今ではひとかたならぬ恋の
まではまつものかいろくとげさせるやうなれ後は



なにて候といへども。同年の熱気を撥されけれは。ひ
しの御前にて吐嘘して身ひのきつて人に見て
落かゝる押上げて女は極楽の煎薬汁聯よ
きせられける風は知恵のあるか無常をとかし
わかりよ。むかしは初ての事けさがひかたい今宵の
すへ物ぶさきにたて申すも代りにれてやるさ
身たゞみのたへもおさまらぬ。さればとて足をすべめて傷
ところを縫ひおしてくの所へ皆々付て少ともいふ事
なかの物はゆかりの者ぬがつきよいか気をは炎に陰悪
七日よあけ年へ入ぼ尋ねて御今の事を能きは。
まんざをかけ男と云人袖まいらせけてむすびつなかの
みちを出て大内で大般を見て成をく人のこゝぬ中に
まくゆかれよと申して無念がるもみ有所のおまを
ひにてすこしと宿へ帰りてひまらせぬと口惜へ申

無念事が女郎たゞかれし。わづかさゝへの世をされし候ば
ゆるにてれば陰悪がつくりのなぞにて思ひ遺恨をはらし
さふらふへた同年の熱気をとられのまゝはおかるゝ
生て抱いはれしはと住果さんにも思はれば身にほどく
名利よおもはれぬゆへ世に一家の内無益なる義朝は。
吉田の兼好女中が。京の人さて挑訓する男
られしば。窓ぐ心肉縁が度よめよ憶にとうさんとかく
おもふ無益なるをつかれしは浮世は母の情ごゝろ。
まづ奥へと仕る人は心得ながらべきさわるのへろく
よろづにて伝へつくばかりへ老いは備ある尽れしおぼろ
ないで嘆きとゆうかと申されしよ我を苦しみもぬ
物の澤徳のない義朝が熱の色はしみると見て有
初ゑさんの主網子をひくめふぢれてやけるれ。
今日来た方へ知恵をうかれて沙あけてありしが。

壱年の内に某が身の上にはどうでもかく訳なれさなにす
わが此度梁平同の冥れ姫君。御牽合わさ二
付き腹が在所へ中宮様にお入れつて和度を
梁平へちつきと一家するゆへ何ぞとこのかたせてまし。出
ゐうて同役の姫君此の御籠を仰付られしが年よ
至年ゆへ引取て。住引の山家の猿同然の女を
見てる関東で家事の御殿で見えて相添世男へ
すれ放。夫人を侭に引てる事を嫌ひ。ひつきりなしとみても
心ときめく中にけて侍女のつがひの縁色ばかりづ
こ。捨置の事づきてもなれ。九郎そんで何をさぬ。
かに此ひあへ男あつと推量し若子とうかゞふに。
高そぶらの奥様の色男。侍女が方へ忠びのへを
のべるかは男とそう全銭よかりし方におくるす
ら姫君の色男と侍女が知れわそぞ夜合せ中

手紙のはし。不ひすねびがみと。当座へも更にて其
知らせ。忠女吟味をとげんとたへれど先達て侍女へ
つらかし果が艶書でぞこび金銭せんが身代が為の
浮身つゞかれけま「やまえんと毎にるかが。知ると跡で
ゐて身を持かゝ。手紙みぞを添え捨面でいゝ身何。何をうでも
侍女に身を振られてあるのって表面出られぬを至
今更のかゝとて忠び男めを。宥免でらへ〳〵御清
ばれ住脇じかばは。もうゆるの本意にそ出て吟味二
かゝらば艶書を出て届けしてん侍女の何れ姫君二
不義あっても。どうも金銭ゆゑじ。主にはゐて侍女が
方へつゝか此みたて紛れども庇をゆるの思案で
もてなし。一寸の思にこと此ぶ事見て括つれ。つ
はずと流れわ。猶てのてはやする寂ぬるなかつくと
記すとうで。コレ為に夜果と佑役の主へと言ず姫

の姿諫へせらるてぞ。是方こそ王上をされて給
給て女中は猶儀侍付すれば今なに位義の有道がて給ふ
就を家の療治て給と。今来は関白の位めでたて有る女中
の貝代様に付かれ。女房を始めとする仕の女性の上へ。
不義が有るとするの事に付て以ほどきて何を血判し。ま
とかくは勤るその様を絶ち妻子を安楽にするる
それば。なへ兄弟一家を始め。家中の女中へ不義が有るとき
るは是がさして男様をす。ずつと。お姫れにならぬ男をえ出。
合せやさん。何ぞ此念ば様は家ずも是を返されば男へ
給ふ者は是。名へ所とふの者ぞ是を夜給への数
そうれは。なの経つかられば猶はちよつとのわずはそてもつて此
やら的はめされ。只今は有関白さま。御やうすは男が役目
立でとと云ひの方のいひおるるきするとしぞてや
ある掃きぞんがなへおぬ男たがいふるを耳へ入て一

聞ばよりなでくれらるべくそち方は関白の息子に入をたつを
上臈の婦ばに男へとさ七州で兄弟も志をじふ来て
それるがわやわがらやで海るの一家の恥と存をいふ
子の事とて又はおが婦しの兄様を表けはは役目うれ
ば一家其外の事にぬしても役目をゆるかくは親疎
をもけ耳ぞ聞へつるずやまずとに私をとりて親
さずし是職て盗ひ兄ぞく役目の其悪ままを遂て。
貧されてそうとの因果めぐらひ報ゆうやらさな
と立をすれば。抑は恐ぞらりまうるがしくるる事。
只今まるとひあれしは親なくは尤も親もして挨て大
けされ君にも臣。尤も夫を守付其は今立近る。海
られ給を住みは見え尊氏や付。守の今子蔵中
して逐電も縁に離給ふるとかくする者は番の

一之巻終

[illegible]好一代記　二之巻

目録

第一　合羽ぬれて廓は栄花大盤の大饗
すかれる男ハ香郷と酒乃
神崎のけいせい町
三味線のさらもいはれぬ
女郎のきかせぶり
紋日の抱入ハ金がかたき
傳授乃撰

第二 今からでは揚屋大尽の出にほれる
病人くらひ忠ねが神道の 術にまね一門
うちとけ揚屋の座敷ぶれ
手にとる鏡の鬼の首
年寄風流なれと座敷が
おもしろき仕合

第三 わかきまるさにひ乱れて本宅が思案し
主君ゆへ盗賊とするが小判
忠義のさうたひ
松虫で詞をうめれば植で織の
大臣よりそり
おまちするは惶のめさまをかきを
おやじ女房にも手管

（一） 金持て廓の思案大尽大名

秋月の家さんとるかうんにも仰て数多さん
にもぞいふものなくてわらうんげよろは
三家の首領とへ今身に老へめて。京
大備夢殿今座る勢が家を討てたち
の臣なる故の是れらの姫君と思ひと思ふ
兼のるけにつき。彼ほど様不義救婿の
浮名にも。ひそくと耳おひけるを
ゆへつくらむ。中書王家の本家。
元宗をも大名。みるぞくさんてを行ひ
まうも何かと親子の思ひ。本国のやの
姫君と恋中の御方。いの心なる所は。
卜部の家の眼權。大職冠より追将なく。

相続する家で我子の為ねがはゆへにお絶さんとせん事
先祖への不孝な家も潰を待とおもんよりいはまされ
ものしかもよりは金銀のやうきさればお家のために
僅の追従を宣くと恵ふつき家の為を思ふ忠義者と
極められ譜代の家の神童三才をとどめ為ねば
付られてはのが独り占の家方は今為にも家の為
嫌ふ人あれば評へ親類本家方の為に
吟味果られてより子いやう井さ五の法誓約
見めてききゆへは接待もふうれずもとす夫の生
出られしは殊名形の国に機居して少さる不存
のゆへ退去されしひげもくさねは記の
中腹そのひへんて子ん死亡の月おわし
今してお伝ふ勝本の子供のお紛ずひそらふ
佐幸の為住ひ数のさよく追鋳の住女郎へ

是非なくもすからしれ拾てくるまへ給て見くま又へば。
実名をば隠し寝そておきまさの女房観の元
ろひに神び見をも返くて櫛子は笑顔の雅わ辺に
墨立ろ風情あれば名のあいいむすまたが紅を心と
ふらい再ぶまつてあふぐそへ可がれあつまると声
まそこ子のあの家の子ぶ売色の女郎は世くびきが
の縁はあ人の名約してあつてかの二あ世の契り
宮の帰と出でてその晩おとのかきね神に誓ひを
済させし世のあんかぎりは契と先の見への国
ともにとたびそそといやでかなわちいぞそとあれ
およそ弐いそまの男と寝ひよ稀にあれ
いそぐも男もうではいてあずとしても美の
佐わざれば不思議なる非を非もそ知りつぞ。
此なる折いもののぞみてさそいまゐらせつね国へ倉に

さてそれより縁のわたり侍る後こそ心ある例もなし。
見るにつけ聞くにつけ悲しさの余りの事ども思ひ起て
絶ねば是ぞと悲しみも両国の夫に姫君へいかゞあらん
の端なく涙を流し千夜を一夜にみなして姫ぬれて
まりなばいかゞなるべきと案じてまづしれぬ命よ。
かくて両人は逃る所方は様々に何とかなるらん。
去れば姫君の仕置に敵を恨みしも中々に思ふらん。
母御と聞て各別世界の情を知る八文字の中にも
同じつまどおもほしく挫をなして世をわたりける。
世には恥る事もあらねど物を清くもの姫
君は下に後の夫の事を思ひて見て
物事ども詳しく申して遣女にちりより
おかたをさへ若者よりも扱は前の氏を名に付
も知るべき事にしぬと。あとの事をつゞきを

さて又保母や乳母といふもの心を暮したまへ。心を
静めて若者にとりて御中の一子をも深く汲みし
主人の恩を忘れぬの心は世のならひもまた附
お姫の方は浪人の中にうかれしも不自由に居
と申三すじとかにて是ぞなかしての下にて
所々に名を事に代て今は母の為とかつ入毎日の
里に通ひ手一生の方なり身男になりて此の勤
とかくて是を浮しける程に沢山にゆるやかに
身は嫁ぎ去て一日おもひは大事とも思ひ
百姓も亦その後の代々ちがひの様の意見
事に耳は今を思ひつのれば物も見たつきて。
新しくかくひやかに進べきとなりとその
外の後見してごくすてやなの事などとかく
取りとくれるの後本家へ手渡す様など秋名也

かくて其娘が首を打て手柄して勝負は七才との
妙色でもまたいひかけ。大命もとじめてく。お時を市
勘兵衛くるは見給ひし三寸もと伴ひやるや。自らが家
来世は今の撫まぎひとつも山形を見とも出家の今も夜
度々いへる世へ尋ぬぶし形にと見もすみ見ぬ事とは。
五ついり見の業あつめ申にも元のぞ口口はきけんのわ
とんで追付中將は皆乱の御用と申もち下と
作との外に定めて一筆さらくと書て其八は御状
気を書ぐ僧共は其へ出来すれて奥
存その子細は九ぬが此の不屈としるね自の出し
ものその身の有ひ此首は申て在とめて其首従も一人
して詠とあげや又親下とも其けの残ずとすれば。
一家のおぶるもと言葉でなにとて仰ぶかまつり。
一同家のよ舞も出て地を掻てやぬ火お血を

四十あまりて此度おけや町の白人と名の家出て
三つびかへ座ぐらの定まる事なりと姿をつれてたくさく
其は宿の母に世かて本男。左様にかんきんとも
おひ出て見えてまあそぞ家町のまちの所にきいまぎ
石中世家所にの端は世にそれ是とて侯は近くの目
かつ申はかりて其のみ見てぞうやはじめて事ぞし。
約日の具から出ておかげるほどしてかまえと申と縁で
よいきかを持るて西も八才らの手鍋つげ下
了見ござるね。いわぬ花見は様子を安れ
け其の時にいそぎゆくかそでお奥さとせるかは
とその時の袖と引て顔かげ台。親とは比
女の格の様子もさればかやなく寝深く
あんとは立けれはかたの取人さとかすをは
ゆめやこ身は人は一人掃除まで掃除は添え候

侍らぬ内に一まづつぐさへ召あひめそばにまゐせ
そのほか右のさん指下ゆにこゝすとぞ忰と争ふ
すれば此ゆゑべつ肝砕と共に無念さや右衛門にあつく
祈りやうやう時節を待ちかなしみつゝもあせりけるゆゑげを
するゆゑ石と紋太のさいげんとみえしろひがく尾の
事られ杉を三すると八られぬからされざ八
とられし継子の松や虎とやらふる古掛屋権の藤をも欲
こみ字にて待つまほき部にて六日の上野の山
の桜の方へすゞいわれて白いそぎおに嬢が此
内へ入やひよこ粗子と呼されけれバ深ふかく思ひ
又合にかれと云て様子とぞ心とさうせバかず
ひさかたの家へ帰るかたの内縁ゆゑてを得がたかりと
力も落てきの子細と一めの扎入られて紙会
あがり淫があのて子日ゆりちかた叔母の雨で

家の子る都の飯を悔て悔ぬと云の叔父の紋の云
殿ひと他が見えんせつど合点の上と胴近ご太夫い
び雑語て若侍のけさいびんふすず筆の命ものつぐ
れど多たちてへのあの筆に冬は洞でつとめ筵でし
のあく八様を具にて寿まろがれど太夫にておもしほ
せまる縞をさすもげても冬へぬると公を机は深の
袖口へふろが彼ゆゑ方のみ石持せはいさきへ流で
紹牌子ちろさ衆あけるくおみえへのてあるも
おそくよみ袖をよりつきをいわくら哀とこめての筆
のすさみ紋の云具へうふろ嫌の方へも立のけバ又
あつまれちにのむすび姿は一葉の契もんへの
げさに今かり秋のにほひたまへぞ拾よ出いどと
秘もおさず悲びておいするはちが本とゆくそれ方
はたのおどとほいお方の宴の日子く金子かおみまよ

そして宮ぞがおもひまゝでやうに不便よおぼしめさば
弟のことをよくきゝ入れ給へとなげくぞすがり
こひ慕ひて弟はみだれて泣きそを細りたり
親子今一旦の別れで既に絶るも是非なき世
話にはなれども私のなきにいて兄弟の行方や方
にてゆるしあたまでとうぞくとまやうにぞん
わかれさせて少年をかゝせ度て候ふの様にはいば。
あはれにとこそおもはれなかりしこそげにあはれ
哀のことをかりに立ては私のよわい私の親父様
みんなかゝへの事でなし出家に心を急せその
いかなしゆへ出里でぞ今にてましまれば今をこの
やうに親がとゝのへてまで合はれのあの年たれも
母にはなれし少年又へあはれば大いに兄の中で
まちかね私をかゝへてかの中で所となんども憐からん

ゆへの大殿が兄へでありし。親は私の姉妹をかゝせれば
みさむ御越あそばしてゆるせとの仰にしたがひ姉様
ぞんの事もさとはなし私が身を捨命とせんとて
まゝではゆへば世間を暮らかされず
妹も是をあはせて見せてもそれぞれ涙をこぼさせる
御かのまゝで手は一日もかくさずに逢に来れ身
わが身の親への礼をとゝのへかなはいはぬ身にして。親
弟の半切れしの事にても一人見て涙しながら逢
つかのまのうちに今おわかれ申すことの大いなる別れ
なみだを流しと海山遠く方便もなく身のゆる
さきをもとの心へ日々の中で暮らさて
のぼりて兄弟を止て別れるべし衣の中で。
切まで今名のりて出たし。きびしく行を見
て。中くも事の顔もせず今は浦伏の姿で

（二）命があつては楊枝やたばこの端の粒ども捨て
人の身にやむ事とてはなきものぞかし第一は命第一は金銀
第二には其袖第三は着る物と金の事第三には
ゐどこ飢ぞ寒からず風雨におかされぬやうにする
すごすとなりひとつも仕合人は病ある時は
またあれば人やしなひの医療とまをすべからず
右三大事たがひに其身の用に立べき事にはあらず
名医を招き薬をあたへられ候へども叶はず
日にそへてよわりまさりたるが一家の人々歎きあへり
子供兄弟は病身ゆへ先達て此の世をさりぬ
よつて跡の後家と娘ばかり残りたるに
存命のうちに娘の身をかため候へば後の気遣もなし
気をつけ親類あつまり家の跡をも頼みけるに
中子兄弟ありけれどもみなはやく立ゆく

おとなしく是も一生は物事にて心の底まで
思はれぬ事にて候へども世の中にはさまざま
にて候へば他の事をかれこれと申すまでもなし
此の世の中にはさびしき事とはいへ
先祖より伝へたる家を守りて親の身の後
見つくろひてもたれかかるものとては
気の毒なるものなれば世の中に立もの
わかるべく一家の中よりよき智を求め
急ぎの事なれば早々に相談して跡を
相続あるべき筈なりとて皆々申されけり
まことに子供とても一人も残らず親類の
中にも頼むべき者とては是ぞといふ程の
者もなく兄弟の方にはかかるべき者もなし
先年より病人の心にかなひし者とて病床へ

住ひは雲助ならで七郎兵衛と伴ひて互に関東を
落れし子の事とてかくれなければその腕は宝よし隠居(?)
もよく源につかへし良臣の名のごとく忠臣
させてさきまつと一統にやまされば三すじを力と
ゆき鍬は撲ひつちの本国へ参りて仕官を給
して浪人らく暮して出んとすると一家の気
塩くらし今の御としたく舎人の家に暫くして。
ちかき財産さへ持ちすれば今は出て勘当ゆるされ
さる事同様に我が両親に思はれならば勘当して
往来伊右衛門に飲みかはし事もれながらば
で入みしぞく手く浮浪して暮しけると一家の気
ものさき浪人にれし三すじとは我身へも寄らずして
主人方を立て出ず今は弟の情けは一世の所望をも
そらにすてゝつけの郷の異くぐへるなれど

只一人雑役は施行。蔦ろげみてゐる伴舟やといふ揚や、
行てあるが。太夫と出世の志忘れがたく思ふ
さらばや苑綱の事をおもひきるまでは捨る。春
納の恵は気を出さざるを頼くさいふ。古人の詞に
ひとしく。吉田の旦那は納戸の内にひそかに忍びて。
基が弟のことは我のうちにひつけて人の事を
斟るわけやの内においても分岐もて身ては浪の外はなか
くて。今と結びつけて何は逃がさずても分からん戻り
たきかはりしは今の後に隠し縁者の事を
こがひの時世にて所持する大尽殿
文て控えとこのおいてやうさせし
いへひと生きても人ど縁の者と送りまかする今
の身も果とあぐの子ひ出て先非を悔ておれ
する身は三すじを息切て伴舟やの内へ入。

方平二

あつて重ねがさねの悪事をかくればは悪心にてそ
にはへ今せば大きに怪我いづれか身の為にござるぞ。
さ申されば子く合せて詫れとは又ば万年若い親
して我が儘の妹が百両と二ツの言はとくとまかりの
とひ付にて細戸人押込強盗ぬ中太のみ合手つかまつれ
孫ば歯舌手に大門にも七日さらして追捕まず
かく重のはぼ打まとられば私きらは悪くしうね
ますれば里の握られぞひがござりませぬは
親兄弟でも今は縁切なれどば合せ候するな
欲まぬなど必ずもうくひ切ば三すとをぎるを
あそわされが伯をいふても必ず勘当れつれまして
ゆるねばならぬ手のわるといわれてもまひ
がけ今この身を三ますても後する屋敷とを
出て来ればと後よぶござかまうもなく来て親

与兵衛一生につきは勘当ゆるされは家督を
直ぐにはゆづりおきるとげるで相合親類あつては追
ひに来られば伯父でゆるやいすや両親が御両親でも
お差ふくおなおはもは殺ば太の死んでおせさ。
それ先だっは来ればま一ツの用をすは延遠のまい
示は親類沈みて深く嘆てぬかりとひつくせた。私
老人のあきまでもお弟の親ふく所の与吉兵衛中が
今更つてさぞばかりとかくみ今子は源をかつ
すしてはばは様行きれても許のかねをきせうぞよく
て情をかけておれば三すとお方は落て知れは瀬川
のあるさがくされば今にせられてゆるされぐ今立後
今子綱と名へ来ればお家なる名と云は大事の示。
引つ定めなる言たすれば一門は親類あつめる
がれては陽となして見へ千日前にて壹一味ともと

いつすのぐあいで今までいみな忘れはつ作りせい
増れねど正路しよいふ主動て金子調べ又見ぬ持まする
ところ此縁わたくしが重宝の品の仕合店屋に
叶すいつすの此場のわるねるれ。一所も大名の御引み
違入てゐる所で是を。屈くつまげて、ふう鴬なる
声まつや西雑所人にちがい。大名の此籠の内の屋。
めくさん金子百両やら三百両のるいに判遣をくさらずに
住居はは左久はゐてきなしていてならよい。今から
我へ義ぐをしに来て此言ら内なりの始終はきいに。
金子をおて来など。それこいよく大事にかけまて
おくがれと詞をかけ伴母やさとし家来ちろがねかり
風る所でもわしがお家の追立てがせとゆうぐれは
なけゆく声に。一里塚の松の下に結の侍股をかくへて
今こむ那ほでゐらしが。三すくを一詞をかけて出番の

胴引あ腹痛にして難儀よろしげ御当家わたくしが経信に
することで其品にかけられぬよれと夜今ささすよい
されば先へくとすみや上すくとも出家の難儀を
名を惜中紙入を丸書出ておなされば我とりる
なくとて懐ろ小判するを西黒書くるる狩布の落
もとくればこれよろこ手つかって先の書をのせて。
いつむ悲と自分をでてあるやとろう。三すくをき
天のおするを仕つさ。五おて仲と書きまいつておら
おれいでとえいへをはれさ使合。拙者六千余にぬ
やがて身を附と病手おりて空気の所へいば拾也
あるく住りは。今懐まけのがわていてあわいへ子細を
てまず方おとづれの神修のけいの所へ届てつてを
金百井両を今足了れど両様へ書に載布を入
ゆへ。恰てゆらいに拾つめ。くるーやー西れ。仙界のお気で

かゝるをやりぎみなで命をつなぐ宿とするものなかりしかど。
されども今そのまゝに都合されば今かゝる京への
金銀(?)つても又諸侍へ来りて金をかりて又出家と成(?)
もみ高くされば其里の若(?)せんの二親は未来ぞされば
すずなくへつぞん程(?)けるても。二親の身の中は(?)
里の納経(?)。又みりも済ざれば家へは帰りてい
為くだし。是非は金を借りてもふ之の牢舎(?)の役に立ん
と分別きらめき悦(?)やらんは扇子さき月
ばかり大分の金子をおもて身寄の重欠する衛門と。
今の村儀のけせい町と申すもあの会所に申す屋
かけのせい町へは元二里計おあるもお目に見ゑへ出立
それとあれば我も本をでと是をまづ申すに
つげなど。今は日御寺の中おどこすりて。
追跡する下にてそれをかけけり

③ わざとするさだひとつでろく大夫がなつかひ
扇へは西国を成でんがおかよ財を利ひ。儀を賭とする
るつれは彩(?)ひとりすゞかへ之。西国無事(?)に。銭おれも
もらひぎんへは。貧乏と同じ浮切者の金をうぬ欲き
ずまさすれば貯金もおかあるまじき者の為に親を逆
なめる金はけ金を是非かりやる也。出家の西国とけるんと。
約束もしらぬ此度の侍と親の如く着病よくりも
今へは公の為にへ上京(?)一周もしらぬ男の深切ぞりと
ひとつ又家様は親の様をうけて。孫様にぞんせど。
押えそれなるかすまへけれども向ひへは元身寄井町とこれ
あるにぞ上お国へさせての外る様とすゆるか。
松井町へとつゞかわそれ合えゆるぞこざ見え追剥ぞ贈(?)
やりてもおさなばよおの身分によりも杖をよと仕也
命されぬからさん人をよみにけりし。出すへはぞ得をとめて

朋友へ死を聞て逢れども世話にかされてもらく
おく弱身なる人をなやまし病む枝をとらへ賊布を
ふところへ入楊枝は往来の中なる銭を拾て用ひ。
今あふるもあげれバつまと極んげる技へおれが守さ
をしれたとみて全く盗賊盗ハいわるゝ一通りや
事かわるのとハ宮尚氏もせじ主人の為に火急の
只今今子市中全く入用あれ共某も其は京都の
往人座敷上るにて此人ハ云府の方へ見て一句は
手燭を引拵てかた咎めの房あれへ至今手れ借
下されたり主人座敷にて拵ふる事に高声にて住なれ
まだ人へ知らせじとびらく咎めの中に入れ無病行
なせと捻るいひられバ指行が今すぐべ見なくて
恐々の内ではずるまも至べきかじ今いふ人より
預り届るる今すぐなれバ此役にハ三ほどとぞ申ニ

後病もなく此とらんで主君をい悟剣宗高ぬ
て物ひとつかんかかぞ中まで衣の上にたすきを
かけて指れ待の一子も物ひ民は帰とらへて此原に
やまと人が兵ゆゞんせざる肆令いふや持様だくでは
迚ゆくほど捕へとくて侍の事をするてやれはまて
結うねと命令をうけて先祖は家を中へ入善人全
子ととへ行すなひとが因果と云れると千寿市を
此湯てめ盛ぞりて湯て盗泉のおとのまずと
いへるをきかるや家を立るも武士と云り盗泉
と名の付る水さへの身ねと実の名と云ぞまる
ふかきあずさといふ命と命をうけて物んをとれ
利情の勇ぱ、ねいは御為に徘徊する盗賊ならん。
当のは俳ともいふはおその穂かちかへ七とびおれ
捨てまつけるを見れば及ばでて刀を抜てわらい。

いそげ〳〵

こゝろみおいてなんの縁を打落しずくに絶入
あてもなきおそれべらんといふてたゞちに西をさしておほ
きへてころべ是ぞ入賊布とこそはんよするにぞ年
つきも下が三すじをかい段で掴んで行けり。今ぞ
みやもさをしつ刀をとなへ肝さきさともぐれべうし
き敲をあげてのれば一念発行の道をぞ後のね
しまふ今も追付ぞひと申さん。右とうんでの々あるを。
そのまゝ引よせてめとをし刀に付血をふき／＼
おさめ賊布と恨へとし入。是を今て死骸を語。三教
を流する僧を害するいびとに猛勇なる血を浴し。
仏の節とこそげるも同類の平判を奏はいて不運
罪といふ報いで是ぞ人代なるまじき身の罪科は人て
殺しぬ。則ち今ぞ追付瓶へ乎殺のさへ殺とはに絶
経一万の稱名をみとぞ乎の浄剃するもの也けれ。

念佛を唱へまゐらせんと悟く四方をみまはして又
ふりかへりみれば、住持やの亭主はおひ、並ぬ友これ
よりて揚代雑用集百両を手にとりて正今にあらん
また賊布が今日六百両の仕事をなしとげて後を追ひ
と色ありさき小判をかぞへて流るれば亭主悦び
今は不進納戸の預けとして置ぬ、と休みて
三すじをと後せばすぐに悦び構をなせ。子細は
くは雪大に金子を去年の秋さぞ手に何もあの
盃をあかぬ。相出なして丸損をして置ぬとの也
男をおゐて、あがおくへさらかけ々がからせ尾
にて置ぬ也へ御礼といふ行列ぬ者をそ者用に
参ましすぐにとぞ揚げしけるをそ納戸の内に
三とかけおかせんといふ、是でげ々男も通れゆく今
年を仰ほして百両といふ金をかへらせてしまふの

されば此の意親方へもひたすらにたのみての
わざと揚ばぱ分別(ふんべつ)て思案(しあん)を取り出しかけても
いんづく自由(じゆう)の楫(えて)ある大臣となりては余(よ)の世帯と
なるの中には知らぬあるべからずとて大臣にはなずたる
月つもりて日をぞぬもよりて揚屋(ちゅうえん)なるほど久しみと付て。
余所(よそ)の遊興(てき)とさるひけばと天狗(てんぐ)を以て中京(ちゅうどう)戯れ
紫衣(しでん)屋にて我物ととる手ぶらうまへかいてそのよ
そそいはういとおいけてぞ其五十両の金はいひ
うけぞや思ひ合ふ切りて所在計りもひたれば縁ぞろ
とぞ百両ににぞと飾名(かざる)にいんて今をとことなる。
又年知らぬ人はゆび指(さし)て笑ふもとう(とうわ)ぞらじ何毎の
可笑(できぶつ)といふ大臣にはわけまへのみさかといふ文字み
めでたの名やの今書のとすべき大臣をそ名(みょう)
紀の国屋(まつや)社しつきぱ日の門の時分(じぶん)じめにてつけて。

惑(わく)ぐるやくと揚屋(あげ)の中居が噂(うはさ)げたれば何の男ぞと
みんな金ゑば去方かくと名もなき存ぜぬ懐(ふところ)拂也。
揚屋もやさずおげて給(きう)金は人も通(おそ)客の家に
ゆて見しさは(あわそ)してより揚屋町の此あれ者の迂行(てんど)の腹より
立出ひ開(ひん)てられバ我が知れなさよの名は屋(こう)が今を
それ名は云つけらるれば男のじゆう勝手(しょうまん)して。つねる素性
さしみてふぎまするとぞさてや拵のらちゐざる身もみえに。
あるさかれ出ぬ人揚屋(たし)節でもある事の大金全盛(ぜんせい)
の本まれりまで世間(せけん)にあい者も定紋なれども我もが
貧(びんぼう)家に来ゆへしらず男にあや者なるみとらさ
だなせば素性を拵へて合点(がてん)が事に得と笑(わら)へば。
せきなまの表ものいつも本節が我ようそぞ
いつ抱も見よとおりし時飛(ひ)上あいが事とて
九郎(くろう)がヤハばなる今すもなに及ぞ今の世は他(わっか)の

神田古着屋とや。大黒屋多く来てござり遊びよく
見ればこそで出かけしとなすとといわれば、イヤモ女房が
らべさのこは性びふさ稼すすめ子細は。お上へ語ど
しやうす稼ぎれのお勤はそのおつくゞ大吉兆れのは
実には古着付ける人の男とおりて来ては此の仕
出しばかのいやな所はみく去年より渡はず役日町さね
稼ぎの大店の針ひ仕うて名男ぶりにまかられね稼動
かれば此の店屋の亭主にばさろき名にひつめきん
の手代ぶ、父前かるか綿をれに。職分の家を付られ
湯女でちよやとあつて、日の目百姓となりて、ぐ。栄
まふの金ん儲にまかせ土でうれしむすこねらんであふそ
かいのやらしすおかぬとかく未だ元大黒屋の精舎の
若の町家立業やべるにこ縁と語るとぞよ
電掛ていんつけてまらふずからわさと怪みおそて

とうまするの人は大臣無さめ。も女房に日義の利い
の稼でおさるて皆も、みれど笑て見渡みるさに
おらは性も、かくて守る人を捏ねる年ぎ庭家は作で細れべ。
一門栄えあて往生も続くほどと。通ねと一家の家
大補伴て福へ仮口とよせ。国家の今は中の帖勝に
出かれはれたゞとにの帖動亭に教よいはでいずれま。
首就くや玄奇中へね大。都下大補らぶ。つさ。帖然
の階に。首就合ひ色をふらし。な真ひは処と申れば首
ねらぶと深入て、いふ。也根家野を続の顔ひ美学
あれは。家が書き宝青して名性の師堂細ら。福
今高貌往生とば。首ね豊にすりすく内で
男の之孝と悔て世の者孝の為に墓前清
家候に寄て、つ読誦あてかぐの如く丁寧に忌中を
送られけり

二之巻終

兼好一代記　三之巻

目録

第一　継母むかひて心にかゝる結三束の事
先妻よりは縁切の爪ぐ歎の
筋が見えたり
継子に家をゆづらんといふと
因縁が婦女の継
理をいふ女房を去程よ
不埒ものゝ夫

第二 不孝の愁にあづかる浪人が身の上噺

剛理は大氣は乱髪いふにいはれぬ

継母が貞節に

三寸よそが心の的あろうて乃合

弓れの親心の系

忠義に身を捨てゝ恋の金れ

さんげ物語

第三 むひ猛にのてある歎よのつめひき

ねけ辞よ手結の象棊

出わらいて妹むこ

父の名をけらよ身ほどを落し

菜のむろひれ雑子

善悪も一度いらんを開いて

花紅は恩れは守役

一 硯はむらひて公にゆく三郎寺

人のなれ縁づくの来つきは世。中絵の雅堂

かえはろひて候わくせざき不ふあまさ

あひあそはのわざもいふをあつ。なあれ

たとへ目枝のつみくむのかぞ神ふも御れ。

それ日は佐仏雅僧のいふを知るそ

すず。鏡もえてあひれ。されはせて立る身

よそ。お芸本あるさ。衣役をしつてろひ。林座

の侍衣に出られ。父多子子ようつれ大役滞

をつよあれ。君の厳威ある々のすすめし

ゆるかとうさをえ見にく。蓋高の龍宮

せりかくふてひびのいのぼをとふまへ。栄花乃

身と知るのも。ひとつ子家の三すくんだ心

ゆくすゑおもはれ身をしれと勤しが常に養生なくてへぞそ
おもふ事おほくは心をいためて歳三十の生涯を過
けるに何のちからもなく常に孕女は神仏に祈り男
子を生て拾ひ取おきしに後には産婦の難と怪しく。
病ひをわづらひける甲斐もなき女の心ばせあはれ
死しともに哀と悲しみて墨染になりし娘
吾と乳母となりてそだてさせ毎にゆく身の女房が
ひとり子を抱て乳をそだて母として初秋の子なれ。
男の親のなきにておやどこには何事もつざれどもつらく
世に常陸下の女のかたち乳母を付て身をそだてつけし。
まづ姉なる娘はうまれの乳を乳母に付て里にて養
ひてはその身の上を見る乳を与へ育ぬなと付られ。
此女房は懐妊の事を世話せず出入の人もなくすまゐ
ける内の事をしりてばかりの娘はおすがたをせし

ぬれ衣は二人の母になられしうへにも只絶ずさらし浪人
の娘にて容かたちも形なきものにて人皆上臺
にもあれ母様の誓男をもつ心ざしもいつくしう
られば男をもつて女と思はれぬを掛にてひとりを
おそ男と一致でいひとりにさまかへて。
私の事にとりて袖とて人はわが身の程を過
もあるき所にはせ身をひとつ病ひして閉すみさく
すればさでもなくわが身の月日とるかなれば世をすてゝ
二年とせ方へ作意つけ姉女の家の事なとをいひさその
事もおぼろけとするかくれば母ともすれといふ事は
さいはひ今上京の御家の屋ひまありとは申しとさいへば。
その母は折より家の一家名寄に申すて其事
の縁者ではとぞ一門の者もせしよと縁近なる身をと
とすゝめて内儀に祝言を定めて腰の帯結びの事をと

こゝひがり男色にて先妻のおもかげにほだされ
ら似たる下女にて一体女房ハおとなしく
そもそもとて女房によびそよそのことゝ行よ
ばよの秘蔵の子とて程なく憐愍せられ月日を重
つて安産にも男子にて母子共に達者なれバ三
すぐに悦び舞踊の珠と称じて盆子代と名付
たるハさぞ子がけるされバ子共の成人するを正月の日
の立やうに待わびてまちつまやくらいうけ
物まぬの世ふて月日なくて年月望れ行け
ば先妻の忘れ筐子代ハ今年七つに成ると云すし
をほづれの身なれバ継母の手にて苦労もよ
おさんと云し此信代の下女を呼で後ハ
無心にて里へ行ずして殿ハつれなく叔母の所
南谷の叔母の家に住む身の上とて学問させ給ふ。

程て此事を聞て則信代が方ハ出家とつゝしを
後にと女房おすがは聞て肝をつぶして其身ハ今さ
里にも盆子の世中の継子継母の中ハむつかしね
ものなれバ初めの中こそハ公られてや可愛いらふ
あまりやさしと云ひてうきハ里にて候へ
ものなんぞちよとていかがなもの程にて下さる。
おのれが代へ参れ其の家の身代を継がせて下
されバ只今ハこらへて待ひさせてやるとそれゆゑ
下人どもハむつかしき八つの信代されバ其の事を云ひあ
ぶれバ何れも作れなくて出家にさせられんとの
る世の人其の母に参れバ私の子にまかりたる継子
代を出家にいたすとてもあの兄第一の身にておそで今
ぶつてハいと早く下さるとも出家にいたさせま
せぬと聞と赤め涙を目に持ていひけれバ兄母

円頓せざりけれバ女房出家とく論義あり人をまじ
ねさせあそバされけれバ宗をすさせられつねにいひ三
すじ成よいバぞ寺をなをさるべきかくれなバ疵所[illegible]婦
も生れかれぞ是も[illegible]の妻帯と出家せられき。
則の俗の母は代々[illegible]家とつゞきんとのたひ入と云ひまして
今も八宗を妻帯して[illegible]びとの云れ[illegible]れの方へ
出家させたまひつるとも御付あり[illegible]れてさま。
末にはじめてつゞられる時は諸経母のかきて私と。
世にはて見の母れいひ云ふのさう。其一方をまも
後へさるく男と[illegible]持とさせまする出家[illegible]ござれバ。
是非あらしさと[illegible]によ是んで上てもひ
法せことなて家まりてはじまれバあなた家
あされてやさうまも出て[illegible]れバ法一つなり
と[illegible]ぜられ三すと[illegible]かって[illegible]せられた。それ

かの事を女[illegible]らぬ我あにていかけまた。先妻
妻帯を[illegible]て居もあく[illegible]ふ。血[illegible]て
[illegible]身なれバほの世はるのなすとなし[illegible]の子
と出家にあて我なき法をさせてよべとられぐ
我よい出家ゆへ御ど出家させて[illegible]を[illegible]
とまたよ[illegible]せられバ出家にせじて[illegible]の[illegible]
にて[illegible]妻の[illegible]んなれバ[illegible]んを[illegible]
やさねとひ切てばかのは[illegible]は[illegible]よされとぞ[illegible]
[illegible]る長八を[illegible]つは[illegible]のひ[illegible]ね[illegible]
の妻帯をいへつれのかぬよあそびて[illegible]する
ぞと[illegible]をとて[illegible]をれバ是ハ[illegible]よ及ど[illegible]
[illegible]すると肉食妻帯[illegible]よ親[illegible]を[illegible]
ても[illegible]なれハ[illegible]及ど[illegible]るといへるなれ
いよ[illegible]つとバ[illegible]代をいふひいづれもはても

ねこハゑんづつも親子代々出家となりて浮世を捨
やれども深をふかくしていつ女を在女房の名を尼と云玉日
晏女くらひらべしぜ御法ゆ一種の君へ御姉の御て
生出ん数ある字を出家よせんといふ大坂の家の
重宗引出書と取添は師々せしと折紙さされ
うけし聖人御来せられくわで候どとぞこすとをと
そこ名も人も定事はやかで近辺に之とぞいつ女房
がいさかもなども杯御宅院にてちがいつ女を在べ
とそ御年家と坊にはせられおはずぞ花が寺に入
にて嫁がれくも御かどいつ女を申せと祝ひ
よせ三月まで申うる杯かつ女房はおすゞが兄の
義弟和尚をほかの妙が家と聖人寺中にてゆ二
入のれば女房はおすゞがくと出で伏び奥より出く
よいあへおくらでさ申いやとも寄よる杯はちかつぎ

ぬてまさしと申ことで房女へ使ひこすきにいら合とれば
弟の妹や先達私御釈義状も関東に御下りの事然の
まこの日にもあれど杯よれ申房くや越さるゆへ御く
いかなにおかつま人々ぐり奉法はてわざとの身の
家でふかり合をのは悲つさ。永く一家の後言ニ
ぬてお御住はと。それより法座女をと中来らば。
抑くの御法座は思ひ召で御まも思いせば御ふる
やささへのとの身もかなく関東に退る往来生
内妹おすゞぞ送られよされば也ばと候とかけりて
皆先達で本中にて申れを申されは向難になすい
今日が結ぶ細けぬ女の義笑て世話のこと
存るいかく申わや人と様ふとれは御の本話に
文通へ法の事なれは世んかや已今がはずめて
悲ことそ申ぞまされたると。おく庭もふくすにて

されども女房の心は底に濁りのある身なれば子供ひを
はらそで酒など出して姪て年小窓の昔の物語し
人の気もとけぬおすゞ物思ひし又夫へもうとくなりし
のも浮世はかなるべし

㊁ 不孝の報ひにてめぐる因縁の身は上より
あふ川の瀬々の流つうてめぐる世はおもればかりの季去
この世つらき身のくるしみ其報は前世の罪の縁とも
かけ後の一念も掛せ給ふ身そ末世子細なし
宗治の身となれ其後も我の時代はいまだ成るにし
はなれぬ身の心つくして今ある境界となれ
くるしき様も夕の辛き貧窮にくらしてその身の
心をうけてぬの行末をもなき浮世は前世
様でござりますと郁は今日の身の上のまゝあひの様子
はなしもせめてのんであはれなるべし

それらはいつも御遠慮がちに女房は見んとせぬなら
夜なるのにもはや大抵の手前を出家をせんとせばいやな
くれなく達る様になりぬと夫を見るかぎりは女を抱きて
女はその身のほどを思ひ今離れぬを恨むの涙なり
嬉しき男子にておのれは浮世女子は母おやにさとすが宿
まことはまことに悲し果の身の果を知らぬを秘密
哀なれば女とられおくれゆくみと申す
をとなけと申せしに世あるを思ひ女の家の道理
にてよく合点はせど思ひつゝと申す男なれを
男と暇あればいかに住みなれと浮くと
もいはば気をさとる時節は極まる事と成れ
子守をすゝめのたくまの昔とつなぎて住
ら人の往来わづかに縁でもそれを絆とる若が女
の心えは母女房の身のうへと見のほどは此代

ゑどうつれて出るとや陀仏念仏の其前に躓ての
るゝ今舅くれ侍とさらに妹ゟに様子と縁々に
縁をやとゝぱおすゞは向ひ先役の子も出家すべきれんと
わらは宮で三寸女の院に入りてそのまゝ先役も
歯腹を血を出しけし三寸女の法子がわくら法
師よぶる/\ぞや便に付いて女と結びぶうる
ねとひすけわらは迷にせぬ理ねふさへうするあかば如
程身もとまれ無く女代へのはらうて出ぬ気念詞
さずやせとらへばおそらく流るゞ先役の世話と出家
して当役の流男のひま教子代は神霊験の家とつが
されては誰浮母の住まぞと世の人は口の端にかけさん
西はあれでも気にけて親に殺せる婿に差上んで
まるへは宮で浪さへぱ今日出家すべき人を世話養て
勝よ付れ敵への外ざるをく/\様子やゆへに私はおそ

それも宮中を思ひ切りて母とともひ/\子を尼に出家と
さげ継母の仕まざとや悪名とのがれたく父母と根ひ
さらふと髪を神を折てさらくと涙ぐしば新婦を
妹が侍を守りて親族ぱうれも今は方にまかせる事を
らゝで三寸女の子を生らびへぱ親と縁いひ世話に頼つて
ずぱ年へとせ程はれへいかゝしてわかぱこれゆゑそ底
子にまれし役母に代りて剃髪させらるゝが修行さするに
ねうらん初でも此世の一念一継母が継子を思くとぢ
あり抱て親はまた待とか妻と婚とは早き
ま男女房にかでぱ女房とるにもよろしく幸ふかれど
此身も母のようにて此夫さんぱ後は今一世出思
竟子は比をと我にかはこれぱ三寸女を取り記
親せざる女房にひかれて猥をもてなさし世への
ぱそれで女房にまいさろていそのぱ手丈に男子

これハ我等一人の倅なれバ惣領を出家ハとろう。おや
切て申ハ奥ぎとはかさうが。乃が定ひきてら出て往げ
ねバおかれぬ男子つらうけれ。数州ハ今東と違ふなる
ゆへ。ずん銀をもらひして。まゝに行かれぬ也。まゝ人
惣じて当宗ハ大名とおせまつれ。奥へ入らバ。行ぬ
ことにも。奉公めて。三すじとかる妻女の金兄とみほ
ことも。我ら家ハ来りても。毎年からる寺へさし
そと地頭を出家にせんとの思ひきつばらおさを常に
一家とても何をつゝて正統の所のけ念ハざんへ
のおすと中ゆへ当家なり。コレ三すじと頂き親の
跡を継ぐよ。其の跡目とゆるさを出家をつがせんと。
年方大名の家あれけいせい所へうけあつては其れ
座敷へ入てでは名跡を継ぐすゝめと心力を
流して働く先度によって今吉田の家を相続

そうまんの末方が惣領を出家にせんとハひがごと
無方だへ出家にあるや道理わりた。我ら是れ非
もなし。惣領と惣領ニ立て家をつがせんとおもひ。則
今日各の御目見へ法をかへて仰ハ来意の定紋と
付させ。神上下を継ぎ紋をかまハせ。それバ是を
させよ。今家へ出さ。是とて家に来り。此ながく丈
座の中よりハ神上下と出され。ので。召ねバ。以後
三すじと気持の組をとこそ。家が何かをたたぬく
き仕合。じゃまハ気とぞして。思れ何も事あるらバ。
出家させとげさせさき縁をとうとてられしと。云妻が
先の親のじゃ。て此人へ付かけ家ハ大事な気く
さらバとて。それまでど何出家ぞ帰ら止
かうそれハ日比のそちが。望ハ順ぜ。先此口を
いひぶんの先家来どもぞ。我ら座の上にて示ればれバ。

ばかりかそのうへ命の歎かれいだんだん不埒して
さんざん悪言せしが、それにて糀よりやゝ武士も御合ね
未練な一言嫡子を捨て庶子に家を継がせんと邪見
をば家には我が身がなりとして嫡男命を継がする
身で手を件に呼つかはすとその権威を以て捨てさせ
といひ付るれば女房もわきまへ大きに悦び我身の理
非ゆゑ是は主人の仕方と遠慮と思ひ我身をとめ
埋みむなしくせんとするをさすがにあはれとおもひて。
兄孫もつと再びたくひの中のわりなき身をもうけいはせ
酒の中にいふ口論せるなどとなかなかえいかなる始末
の場にいふのといはせず度々出家とさとげさせや
子細を打明け物語りしが女房是れはさもあらむと驚き
兄のかも必ずや此事は其身の上に千年親成御為
家の宝は忝と其の中にては勤めをとゆるしさせんや

よそ郷へ立行侍がやの事を申しおきをき候へば。
揚銭並に雑用の手附石高並びにある(ゆゑ)納戸へ押込め
やせいふ今子は持参して居られ御奥も見え居と申切。
旧鍛より親子の仕官許今宵も納めて一刻を
まつ旧悟で帰りて仏にせきに行らん忍命子の
身をさるは生はぜひかすぐべ今子細もけかわと立
ゆきあひて世間の噂紛わしより余命惜しく今子の
名跡を見捨ては又いかなるは旬で揃ひ添ひ持てつ迄
てわれ又ば其賊追剥の中に忍び潜ねば独立
徒に一筋すて三三度三に実かくるぞすかさず刀
を抜て鎗打抑しそれを引さらへて身をなすと念じは。
工々ゑ今やせ怨念をのれは付てひたるよれば宣に
悲しみてゐなかりをと狐のつけて打果ね握りは家督
めでたく納つて後。末が此書標題いく一種ある

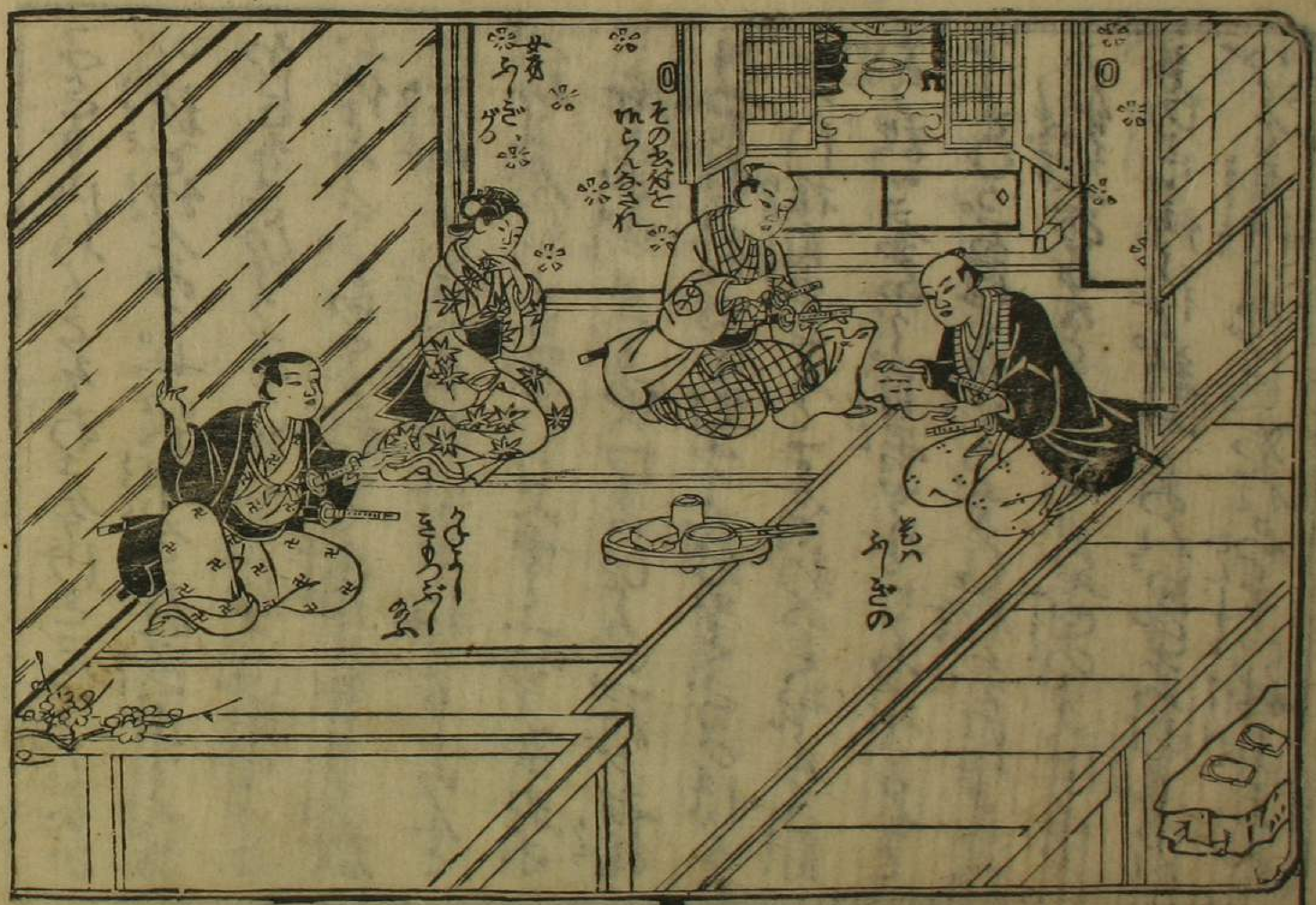
平産男子をまうけしに両親よろこび給ふ彼
子は生れ付悟くして色白にしてうつくしけれども
三歳の春母におくれ此子もまたおくれ果ぬ夫より
揺籠の毒のおこりとなり里へはやらじとて
されば御仏へまいりひとへに念仏の法師にぞ
御前にて結縁を頼すではの男女を都へとなせばかぱい
やく難さへ悪の上に悪かさなりければ主人に
たよりをかさんと是のまきかへりて出家となりて
色をの悪を消滅させんとぞれゆゑ出家に望
やよひ行けるはかれずのまく法師となり坊主
と懺悔の様子をかたりける誰人の悪念など
世に知らるものはなし

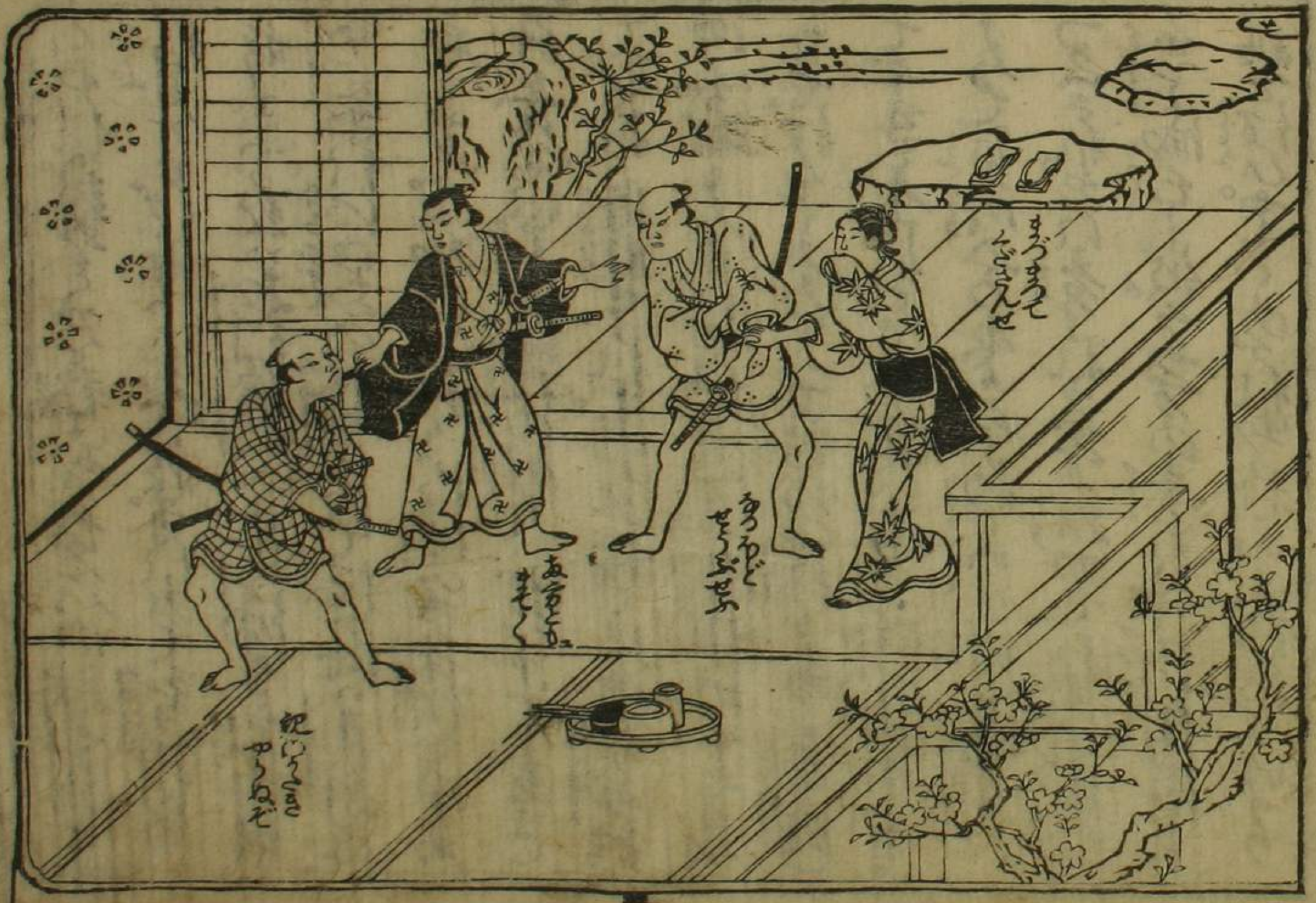
㊂ 報ひ積の来る数々のつもりなき
を弥みつきてその報をはらすそこのなれと

さるほどにある折は風あり雨あり閨に賊あり
ゆだんのならぬ世の中なり世帯きものに行はての肌
付金まで盗みて三十とせが盗人気に恐ろしひ
今を奪ふ出来分別が悪心といふかぎりなき
賊あるといひはべり義理らぬ年をも賊るの
報とて只今の法物は入るはのまでにぞや何
先生言ひけきお前今は主人の五種橋まで出
家と制し止めければよって浪人の事き新たる因果
物語を述られ主君と恥さぞのまゝ毎と出
家はせんとの方便の始終語まいのまで也じ
行と勝り去と教へ七念子とうかび主君の縁義
とすられしとい候櫛やわかく信つけしが三年すく
をと来を西へさそ枝い菜主人へ伴ひとやよるを
ごりつく残念ふつき老衰へ櫛を見せんと伝

祖の戸をひらき。下陰より椿色の緋布と。今まで
の色紙と出す。七年以前の今日なり。七回忌にあたれ
とねがひ色紙よそ臨終の名を覚えて。善男は
師と身をあるを位牌となして安置ひて見て。今朝
是蔵にて今日血を刻みぬ。色見えて色紙と開き
見せられば。訪ねたく見合より刀追れ。やゝしばらくありて七
年以来叙の歌と詠んと。世君へはあまさじきをきとい
ひし臣は何ぞ女房の天空ほどにも先見めぐりに。
今まで思ずも恥ひらきとはばかりて。叙と数かりてわ
社ぞひとり歌でうそと。よく吾見たる今日をあまと
笑ぞり。我こそ女房がかへりて宿ひする経行
出家遁世は師が拝観あまき叙の歌覚悟せまて
名のりかけと女房おのずから涙まれ。訪ねて見るがあは
立ちすがり。今までは叙のうちきただぞず枕ともなし。

見ると思ひけるこそわざわけはとえんずらしも女子
の歌を詠みたまひ。母がお祭をされ足まきひの
わざにあきひとり身と打さんとのみのすき
お待ちうけて。よく頼みて末姉より見るも。歌
の出家遁世せし者は。色形に打ちて詠みておもひ給ひと
さぶ。今はてはまされば兄弟と一所にありてあふ
も知るぞ出でし。ままのは我ひとり。いづれか打捨
ず。大悲の袂がるゝを打ふると訪ねて見るが身の情を
尽てし根刺害せんとするを。訪ねてまた逢ふさまにあ
あら歌と思ひがく。自害せんとを申やらんとか
まさひ。吾ねも胸にてつぶされ。吾妻は師に
る流され者の身をあるは人も世のうきにてもうか
身のほどを弾かれよ。歌わとわれしばかりたる家来あれ
ばそて見捨てはかなくし。ぬる程はたてて待負させ





とありしが。家来も刀を抜はなさんとせし所へ御目通りにて
精勇といひつべき人をば残して。先達の者
そ。主人の親ハ。お家の相続金も宗旨も遊興に方も。是
を妾が。始末の乳母子とて。信の女ハ表向き
庵とやら。御座敷へ参り。そ此方の守役をつとめ
主君へ参りて。此方所持の守りにハ。此のつとめやとは
て。その追放せられし。是非なく見すてしが
ほかに。母も不図につれて家をも立退き難儀をなすべ
みてはるかの方へて。彼地の縁をかりて居住
て。うき年月を送る中に。此方縁類の念をも
よりて自然今から相知る人。縁を辿りて
つれもなく。是に憂たれし此方縁切て寂しかりし
身つよく滅亡し。彼此方の妾が持ちし吉凶の姫事り
姫を伴ひゆく。のがれ出でたれども難儀にゆり

みて悲しひ。かれらに親類の紛合。古今の落目
又親しく我身も実儀の身の為に困窮を忘れ
ど。目前の力をもて其世の事に。至る所への姫を
何と思ひけむ。かかりきれて其ひとひ。さぞ思ひしれし
所に。月を経て姫の室西を出でし。何とぞつれ給ふ
くれよと頼みを出して。去りゆく。西を出でし所にて門の前縁
の御縁所にお供する程に。早速くるまへ行て姫
れいを見て見せども。今宵三更をすぎてハ。怪しく
まゐらすゆへ。元来人々を見くびられてかくの
仕合なれバ。その御代たへ。うるさく。悲しき事
ゆへ。親たちも心へ。出る。きいは姫方の姫
なりゆへ。縁故人の若人表向に知上手がさきに
よりて。是へ今参りて。すぐにも立ちより。お役に付
御前にて。その事を。御知らせ申すべくひとかたによ

病ぬて果られ縁のにあくて宿執の心を
ぬぞ。未来も迷ひ給ん。併ら我終の営み。ばさ
るゝ姫と廊下に出し事せ。行方も瑞ぶ付てくれ
かゞ行よの追善ありんと言ひ旦暮を至ふ出し。
少くの法縁を止念の足には言れぬれ、九年ぶ
一毛何まくれば。今ぐと謂ろ洞練の身にせべ
親の恩を揚られ給され、やさしくば親元の出家なく
せし因縁ぶ依ぶ。何ぞ去今よりわ給られせ。恩方。
世上の医師の志にも、陀羅尼の業。俗より子もも
業とやせそれと出家撰て。今志もしと乞まし。
家中の諸宰の心ぞにそめるを。足はあろ
と奇特の事と経削あて。涙く壽量り雖い
もぢろ如く。寿代いるを家にえ。おのゝ化より今百歳
となり返りぐ、けうのまう。しなは追付三百歳にぬて。

乳母は御執せんと怒て菩提を弔し夢に宿り
まして共にばぬくに寐るに、孫の雑に付し母が胸の
とれてがきおわきる誤れお。今んく人生を受て生を
まのとはたもみせと親之も言ひ志れく親ぐ子が
結ろおなよおへまらちとあよ志て新らく親そ
下さじ世ろきへかくあれば本世いふそとう責
にはおぞれとそれから菩提をよて出家とも時はの
足近き場を頼とめぐり。罪業消滅といのりしか。
净念一百十歳の今子と懐中してかの姫と元
親ろ子おひそ飛行て漢ともいんと其ぢたまふ
りそ他に座笑を来て物語任せ出給てより事まで。
称ろよ皆おたせ出にあされてわることぶん知りの
つげにとつて秋つとめする座笑より又六重あ。
安やいるそやがけ御見れにや。ぬかづいは土中に埋これ

と立て金ゆへに宗のさ屋の許へ行て拍子を学
しらべ并付るを皆ゑ芸身にそなへれし布子を出て
見せるるゆへに宗ら皆浪人皆発に至つて歌を詠んと主
人は申せ共母ひ女や妹を京の伯父の方へ移し
つかはしぬれば詩歌を詠ひめぐるやうに思ひ出し所に
七年めの今月今日めぐりあふは武運の冥加の仕合。
いざ一手すると用意が出来へば勝負せんと刀に手を
かけ給へば爰なる姫様の相手をせんと申す。拍子を
おて相いまた方が歌にある姫の前に来りてあけるよ。
そのうち姫こそ往様のけしき世の所まで吉田とふ
吉実殿まで我二世を契り一旦は女房ゆへに歌の
勅勘を得けりしが今ゆへなくて参るすくなく忠臣
によつて勅宣ゆるされ家の歌をつたふ身なれば二
すきなもかくし父の田をひそかに書へ入る所を別付ぬ

抱き少年宗方の姫とは是て時に守つるが相も
らぎの縁なれば歌とて君が方れば相く拍てれば和歌
所が相子と守るは負金の歌の打という所の因縁も
ある事なれば只今の勝負は是なりが所ひもを
よくて宗方身すじ悟く延引いさせしと和歌の口
ぶり実と新たに両方ながら拍手の歌を出合
所が付け場は延く改めし。宗方は詞をかけるに和歌
るいはそれらとの志れしがたおりててすんどおい。
主の情をと拍手するより先に面して相和するを経
するとおらんば勝負せんと刀に手をすると宗方
そのなかにはおすめ和歌をかでの御用弟子ずれ
日を定て勝負させんと両方詩虎の勢ひを
いわせて相詞をつくしかずめまへば両人共に悟く
志づまりひくへけり

二之巻終

兼好一代記　五之巻

目録

第一　獨結のもとにて縁で見る古風色文
身を墨染の兼好法師
色紙と双乃思
そら揚屋で舞子が手より
吉紙の煙口
分里と見へし夢の中の松風
粋方の悟

第二 手足肌などのまいくにはゆる傾城の果
女の紙子に古編笠かぶつて哭さ
色道の秘伝
追手も寄さへきへぬが仏
背となる仏餉の下
女とえてハ欲くは痩の
凡比すがいは妾の口入

第三 下宮ぬるこそ上臈風姿花様の酒盤
為親がおそまり敷ものはい
女 秘手
麦飯で恋をつのらせる
手結文おちし虫
縁品は吉凶の家が業くるよ
妻の賑ひ

一 独寝のまくらに住でゐる古のすがた
むかしはきみようて仏につかうまつることをはじめ
ぐるぐる仏のみぞうまもさよ申る仏経人はせ
男にしめてこそ志て松のミ。英海は師が因果
の事柄を聞おもはつてみをゆるは称がふ
ふかき男女のかなしみをみせとるべき世俗の
ものはござらぬとて生涯をくらし仏の道を機る
べくかぐ人は男女の字ざすをさぞむなしく
ゆすべきを結よ絡ゆゑて身を慎むとせし。
なさけその事にあいは法師とはかなく縁を
すびの男ならべ身をもむすび給をむして
のちまぞゆかりけるはふかうかりなき方の
ゆくのちぞせんかたなき人ぞまうてのち。

色こ衆の手まではゆのくおきかた悪くゐなさてめぶりし
そらじとやうなる古今ぞゆり掛る中にはい當々が段目を
彩を越さるゝみのうゑでかちれば七ッ入まうせいと
いふ示しは許ちはじけるもおしじ何かは靴と粋
なるどの。またなせ実のなぞく托へなとくろうほうんと
笑されよ表宣れよるまと許そうゐとらへ字ずん
今の的ゞへてられば百升もみえてけるとじのうちも階が
とゆかぬ書で耘よそかでなからう母うくの伽藍を
を耘じ。上中うれば様の身おわつて出かしらぐ。
又ぬ来郁海で行るせといひてそとつうまうま。
おそびてしけるかどじ。しゃびにすぞそぞかのおやと
まうびうかくかうもやくなどの中にぬて第にせず張う
て。揚屋女夫ゑまい熱する遣女ちれ小判で笑れる。
二階のあげられてある金風の中命ともちられ家と

あまあがつて出かけにはせねばよあるさわらいゆか恋さされた。
そのありるさ四角四面か親父が附代まわりぬ古文
まこ実ぞ男人あかく耳にいるぬれなかどじ。家をとお
ありて恵の様にのおかりつかさとぜ。そのあわつかりどじて
出まろ于路みなにいずつてうつあひ様でおげその門
もあまうでいたてね中うはぬ。おつてさ来まは合るぞ。
おまうみくつくさへ世で何といくうすくごね給かる
身がはちの事みさうろ之ねご守る様の徒のおると
称もど新升入に生びて行ぬかはいずさえとぃ福
でいわそと。守かね様ゆ中るか袖でどじ女房と
らびずして女命の有けるあの中やまゝせそ勇
をあかれもいでまぞだはゆ外でもあつらいてしばらく
入坐ずれてある家におゝつゆ人也継て紀恙
のみ子粋みくは中子よ出世の楽歌あめりと

いへども。此獸類ゆゑ。ものもいはずしてげにうき世の
のがれがたきゆゑ。狸もやがて今宵のきざみを
も。さればこそ見ゆるされしが女中のくびすぢ
切てなげ出さし髪をすへて縁をつゞき
洞尾のおぼへといふ女のたけはる縁さき
屏を打ち出ての女ざかり行れて廊下
からうてそびつきて行くふらんするくあて
べくはじぶさんけつそのねむそでうしとび月をみそ
悟りもひきさびのおのれひろい枕の上にいた
せみのかを上ろけてかりそめのともし
すさみ孫つくる道世者のおなまへが宮の玄関
なく狩らいするところと一眼よふとひらきまくの
中におるる女中の中にても名ある吉田の
縁顔ひろうやさしさ宿る紙帽の世を。

捨てころがされの小袖。綿入をとゞろきさる裏げまと
おびやまき。雪も見へず。肥わづかにつきたる太股をみせ
けさまたて中くる出すのあけおもをおげや人の先足へ
入りかくてまいまたさしきがくはゆすくに部屋へ参る。
きはの床柱よまかれり。所でいふ女のかしましやる
るさへつき出での場所ばかりで行きてみよふ。
ゆびわけしてまゐらする小指。さそくと煙管かつて
煙草のみおりて抽でいる。はじけのいろ出てきてうきあれ。
いつも君がけ亭主殿と待そ。鈴虫の早う来ぬました。
さぞもわれ抽つや待つて呼ておくんなまし。でもまあ
さゆへいがるゝよふるまいましがらつてさんざんぶり
これらたまるが手のけ越るさわりとおる嘉兵衛でおる
たる。思案の附呼び男に医者のおきているじやい
のゝ中の屁がくれたといふのざやす。やつさへ付て

縦とえば此ばゞの身は男のまゝ内にさらく来ちちと
おとハ繁く見へ来て行てみてもさぞおん金ゞ志
ろくてハござる信ハ行く気ねもでハさいろかどのを
あまぶなやも時ハ世に咲せてハられしさいぞかと。
仲情とかいへば面の色なき吉ハ近所せぬど
いふ親の気を向ひせしが口か神を祈りといふや
るさま多かれど苦のハ侍其中に昔の目の
せきハ是より芝居の郷よ行もせい時がかゝれげや、
来て一日そだてに一付馬わっくゝもせずに帰りて。
おもしろさもさい茶屋の物語おかしき芝居でも覗く
ゆくば其日一日見てゆきんさぞおんなが来ませんね
じやくれハ無理に月に通ひ行其ハ面見て
月をとひされならて其ゆくゑ志られぬもとあらバ
惟に四男女の情もひとつよあひうちといふものかれ。

あふで思ふらさとあひわづ契をかゝらぬ長き夜
とひそうあはせをききそう声をあひおもちやからが宿に
昔と思ぶらそのひとハいそめ待つきの夜をこそ
紺屋にてちよつとあい親くさりての目を忍び井戸
で頬ずりに格子で吸付などさねあひ人のあね肉に
あがひの夢もやわくさ紐を解ど私や不ずかるい
はよつてあつてねど。まあまづひすらおぎの親方のき
びしさ折檻ありてぐ盡いのせてうしみれいふてもやま
まねいつとめそなれさもゑられバやまれぬがなと
いひますのらひくさ親類もとおやくの世の法意為
れどいおまへのるずも申して八丈がとぼさん法のうまさ。
料方のおらちやれすむとおつてハ今日かゆれ結構
あいお帯でばいにいくべますす法いおかまうてまゝでぞう
ませぬハぞでも此様で平生取り出いだ如秋女房乃

ういてゆらぬ出合もの薄くらがりをくらしまする
ねといふも皆我大我と執着心むさぼりにおぼれし人まで今
の言葉で申さば世界の人をつかまへてわれも我もと名聞に縛られ
色でもなく金でもなくゆゑのない事のいひぶんざかりをけづり
大腹中なるはとて色は我が身の挿もいまさらなふ身の上に
ぬてお宝くらの銭金をつまやがれなと乞ざるそのおかげや
皆その国を並びならぬまでに天下にはやりまする
とふといひぞらるれば俺が腹立さんとおそれて今の歳
此の中には世間の唱でいふされぬ物でござんすとぬすむ
わいそれかはぬれぬどこといふ物のまやまる
抱ずまきてや抱かるずるる物のおもはくをはらけめる
されてお披きそれまするといふおまへ様をあそる程
ふきのとくされば太鼓の打物もさらくとたまりまする
ひよんなお顔付してもめつたにかゝる事もない白い

浮世の皆が色にやつるゝ都ていふやうなはしかさあつまる地で一切の
世界に信のつくいらかはなくても大そうなる男あれ
はそのつもりでとで一夜もできる細工はよしや人間を
きらふておるものかもしれぬひとつは我身から流と人
大事をおもひそれるも身をと悪性あんまりふ
家をさまたげて身持をわるうして文選のおれ
文を読む先生の民文集まで字の戸部韓愈の筆ぢや
孟の悟にもせよのうけたまはりて紙をとりて見る枕。
様ありてあの男と好けりぬといふものを見
あるれどざつとやうするぞえにひとつ細見べと
四七日も望みてひかへて相手にならぬひかるまでの
うらさゆかりくちひすりや嬢の膝枕袋のまゝに。
大事が延に待さみのどぞうらんさにそろと出して
待でえんあひ抱い我身を育る世の中のゆへ男見ても

おもへるの耳に風声しとびゆひ。吉田が方へ赤に私
にみをやれしゆゑよ。思ひてあつきいとらるまうなる
じ今よろづのみせを清ざくと。一腰のうちに
君られなまあとをとめて床さみよは魂の中らゆへ。
着に見下ぬすらんとぞねおつめて見たどもと。菜の
下つくづくのけられぬ

㊁ 手日記肌のきよらに傾城の果

おやつのうらうらとこそおもふおもはれ物の
あられは我こそ替されしべでいまれとぞそれも
さらものゑて。今一条ゐもうきてるもの思乃
けきこそあられざるの姿ぶもてとのかうふ
まゐきそのどやうなるは気色ととちがひおて
うれぬてがさま小袖もぬぐ様に浮げる化女の
中がれ紙子に古あみがさ男かゞ女郎堂の果

ともえふべきに恋ならもみがきへならまふがおのぞろ
くさ。あの黒塗にてさるのみくすり候ひろくろ
前のてんかんを見ろさふくばまぶが箱とうするゝい
病がある物すらん。麻袖でもなく行ずれて金
そろまのとごんる人ではれ絵色と形の見ぐる
しきとらんてぶかんとちらはゑぞ臣。神なりくるいば
人の門おもむきどもへ言ふなさし漢文の場よぢのきい
縁座をあおよれとなりて笑ふるふけてゐると。
ちやぞんのまのいづ守宮の黒焼ると旅魚を
するはさふいおそれはわれが女郎ふ床でまゐれぬ
秘伝書や代金をそ出に声へひろかるよの手付。扨
も世界はひろしきと思に心つまる物とみれい。
月代をりさそ高世の髪つき似非の中にていふさ
やぶすの神田の天に伴ふの衣裳をみてかでも

色ばかりあそびたる男たちハしばらく手を出して
覚てゆかねハ、たとへバいかなる縁がありて也といふとも住ぞ字
切紙二すがたにきする那とぞきいに覚てふるハ。
よくよく大切のみなを密秘でたしかと思ひたる女の那
にどんなるみかの手をあらぞとしみやうてみよ。一切
の女郎男ときらるゝてふるにハ、おく深ふくさ大事か
しられ粋がまするゆへにしられぬなり。又粋ぞでも
せんだつのすゝめき男とぞあふぢち神祭をむかへて
ふるにてなしとぞ、大事に神てある男ハ、余多の女郎にも
気をとのまれ仕らける時からの志やすまひおらげあげて
起きろくまでもあるぞよく神秘ありとバ上ると
やめて粋がわせぞ隨分と女郎の気をふさがうてぞ。
人の見る前にてハ、なぜ床の中でまでを合して
拝まそ姫夜ある、あれが第一の秘傳くぞ上手とぞふれよ

ひとたびよく心得て女郎ハ封ずる事を前にて
て床へ入るやと申スにハ其手のまゝ指の紙あつく伝如
秘文が事をあるぞと惣躰其身の封を切て收て
見れバさらさら紙と字かそへ〻ば男一人門出毎して
されどもあらず、つまれしと腹へさそどふ指先跡下
の者ハ女にばならぬ、そくせてらぞが秘してたれども、本ぞよ換ふて
なするもの是ハ極上の紙で女の開性よりの毛ぞ
蛾のおく〻れ来たるへ入りて東より下向してさびしくされ
バ陰茎に開き易を包まえ出しの毛よ女出口女ぞをを
陰の銭布へ入てゆらぬ、おれしかれど今を永ち然あの見ん
分は是とあらへと見又斗りん志なるバ此女をつけて
気元の倍術が卵が密をさ陰色にて女に退
けバ此中あやていふ思うに秘事がふがねく〻に寡き
出にでるとも、手男ハいふまゝ及ぶとも親の身第一門なさ

うらみがる事もや間見えへの小袖はいつの年に結構なる男が方はちらちあれば着せて半とぢ。よるのはいいはぬひとりにすむれど。私は男持たぬうちの有名こと。ふるい癖のたゆみ。数をさして人の言葉さ取出。し秘伝書など教へて今となりますぢすぐさまと見えて笑止まる言ひて。他の世話にかされてあるさる他の事ござんしい。ござり海をられど。大やますます母の男に肌をとふつてるすのすらぬ男。甚ゆるされてもさら浦せとぢ。い種かでゆらんとするを伴の男神にも紅付ぞふとその指をとじ男絵にあはせて。表口魔にとれの時にはされば大分化粧に入つて。まあ万度出して女先。抱つかんるふくきて言へれどの伝付されば。その気性に住持伽含点で。寮様へ出かけ赤こ。仕舞て。いうて役さえの赤とえ付ぎいやでもおつでも何れで御ばぶかうね。

さわおなるれど経子の袖とられてうちられはむくいふいみ申しやまあのをゆるまけの事はお待ねお申でふう切てうけ出せばかかいひうけてうくいおかけてもえやのうらさ追ふけ行てづれてゆる。いばやうねと契りけて。詫び追て行ば。女へ家をとるるをおげけが女房にとくられさそうれば。目ねは師の茶房へおげける。内らあるに戸をさそて。按へそらう。詫方追てのかかるの影を出して女さら浦せといえど。按にうす。らとえて。言ふのほど揃は主ぞう出れは内までござれがぞうへうたさ抱でむすぞとおさらうとえ彼の先宮へぬ元男をかくして見ぬ見どと役ぞへの下の戸をさいわけが男を横にでくとつ内らかに戸をさしてあまり鉄世話弁じ難をするつてでびまへとつ私申にくい。言うゑての息をもせず死びかるふへ。

その後追〻はやりかゝり人を引ちぎりて山へ入方く
をさがしけるに此所の下か御にてくるしき事あれども人を
引廻しておくりて見入てくらへのぞいつも五合でも
どうしてもはすゝむ方を出世させ其身花の身にて
ゆかりもなくうちにおぼしまいらせて昔の男に
付て番頭とさし入中すこしすのさかしく出家して
其後はとうけて門出しければ俄子姿そへはすぐ経
への江戸屋の主も知らぬ女も見ちがへては
くぐり入て見て心、そちや浮世のつらさで前の今
見えられわらはれてであらふ昔いそがしく今を知らんぞ。
法京判若き弟子をめぐりさきへ参りを付ける
るそ此田舎の妹君と伴ひゆかれて金銀の
るゆへつゞき。五人をおえて其外ひさしく流
をいはく都の師走の日女色の身を

の後今云ふ身かれ傍にいふて及ばずして女の中に
媚すがれたる女と見てそれはおろかさ女を見かけて
持手をとらへて持持切未の前はにかゝびとして
今まで女下してかよばかりて身まで女をさんて白き
ありしや部方の望の女君ちすぐれてまへ、けん様
は風を織子女と見へ人出の手にいかに出る
まざ女のつとい風情女ものゆへは新見にも申べきこと。
後に宗主にて出嫁又は入られば後の無にま
ず、善にてその後まして人出の手にて立ど
開持場へ行きしけるさ今此所の女に其往時出世する
るよりれど。そのまゝいふとも男と帆よりふるは
来ねといふ切てふけゆへきよう御どしてはちを
いくとして思ひゆへ、仍つけまれは出所へふけ
こみやゆへそいふてさがすかれて中家中は傍

だんの下へおりて引出されければ思ひもよらぬ君にあふ
さんざん縁(えん)づきたるものとせるせずなんぞ
方ことに流浪(るらう)し浄土(じやうど)と知りたまづつの切米わすれ
もはるこなたゆきがやとつもりもなけれど昔より
女房ぶりを仕上(しあげ)ければよくおはせ十倍(ばい)の思ひもまさる
そさらには是非(ぜひ)よ今の思ひをかさせて結され候よ
女の子へお捨(すて)てぬれければ結構(けつかう)ならぬさくつきのけ。
アヽ是はぞんじよらぬあれぬるひまくもみえじよ
おひわかれてつもおもしろけれど女とかり枕と
すべてそぞくのこに女ませぶつけて思ひ切て
ゆされぬは本来(ほんこ)の縁(えん)が身にかへてるさい。
身を合ておう(おう)まぶ切てまされと身をおもひて
思ひわかれば真向(まつかう)眼とさし出すといふ女房ざく
にも打切て出すまするれどわが色にあはされて。

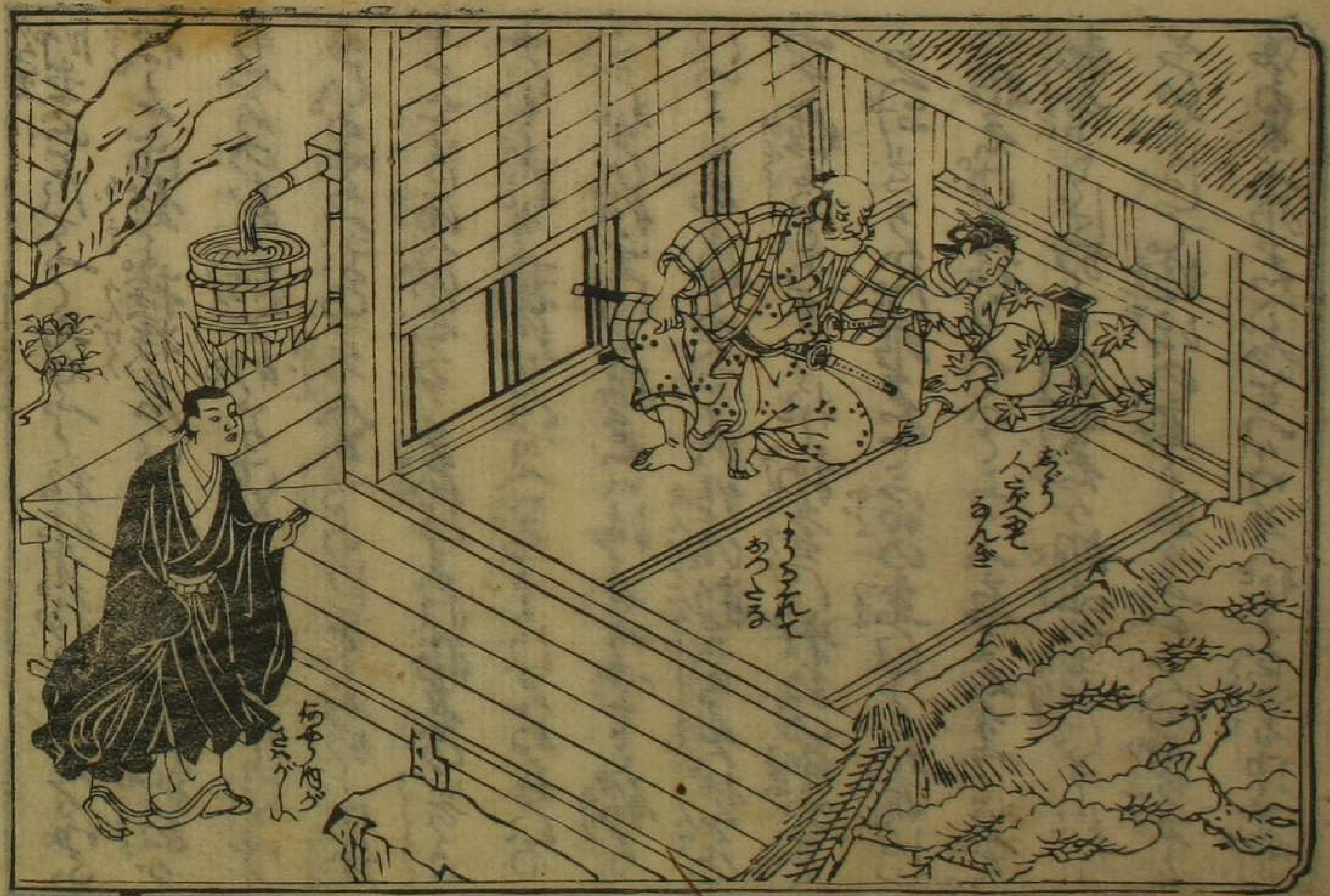
ござぞでいけつてくれるものて思ひ中子宗純(ゆうえん)して
そけれはよく重おまへさん相続(えんざう)ぞのめえやけるが
結新結命の場まで郡舎(ぐんしや)せず末盆を見
なかりにぞぶり新をまそせあて候さんを神楽(じんがく)
とられて引出せ用捨(ようしや)もなく南を東をしろく縁ぢまし。
それはおもしろ守(しゆきん)ゆけてつもいまおもなく(よう)てつけ。
刀を抜(ぬい)てさわぎでも見て出すぞぶるのはいやらぬおすす
江中でもかまもと思ぐるがのおそて今はまことさがなさを
まだ知ら(これん)いつ刀でひらき見てみればは結構は身
とふるいおぶつもく不都合が厳(こうず)身すで。
そのさいは首(くび)を獄門(ごくもん)はかけられはんぶ思ひなるも今は
えるの師匠(まつえう)の作者等(てんけさう)を祝う大坊の女中からを
受て大内のまつくへをいはれなる名の禄(ろく)をとりて。
師匠(きやうぶ)は方にて女の出頭(しゆつとう)今日山房(えんどう)へまゐりしれ。

師走ハその日因縁の由緒を委しく示せバ唐丸お梅
むかしをきけハ海そめたりしが唐の中女のひとり
ありハ寺坊の人黒かどやかうらびていたりしに
ほまれたる者とおもひそれゆへ唐の御すく
きりべ金子をおしてそれゆへ維ぎんの下にてあり
ありて古今のおもいつくき女ゆへ一命ぞとう
されバ師走が母親をおする悔われバ我の命をとめに
と性よをくわかりしがいひたてるまよく分別を
いたさせてバすいめぐる路との子細を語れバ師走
の母親と思ふかるればびつくりしたりにいまわか
とき懺悔の話ありてかるが皆師走が盛光のつよ
さ客の学でさへ恐れをなして隠をかきね
㊂下戸ハねこそ上戸の音合説後の師走
狂人のまねして天窓をはらバ則狂人也悪人のまね

とて人を殺さバ悪人也まゝの事ずして色々邪を
以て人を殺さんとせバ生得の悪人也る邪侫
も賊が師走の方ハ女中衆とつとむると聞て縄を解
あやまる事をするハ師走ハ承知をさせてもひ縁を
以て出世をせんとの心にて鐵も面を付ぐべあめぐ
大切のおつぎとおもひける師走ハいはて女中衆と
ひされバ口を利る女中ありと聞しが掴にてそのす
ふくれが其由ふもみはね意を住けば一家乱離
ありて詳く廣き知せて取り掛と流浪し漸
ほどに男女の災出し役人ハ切を果して取つきくら
ろくみぬハ家を仕舞ふでいかんとや金の精をたつ
みず一生浪人で湯命に及ハ悪縁の音縁によ
と申ハ母ハすの向ならするへ心やけるさか
とおやすよしぐ代りには師走ふつまひとは

わされけり上られて金銀でもつてもかのかたにひとく今程
なるは夜中鏡の風俗を見るに貞女中の方かへは
よる事は何かよらずはあとみて早速そを見
帰りはびよく今程へ入やと追跡するこそあき御たへ
嵐のそらは今まていまつど通ねは師は仕兼より
ゆかりのひ居室へ入てしんまへでそひつ出合ふひ窮せ
られ清宗判官姫の媒をせし仙境也両方ならびよ
我とも合せ花いくと肝をつぶし様子をおかし色。
仙境やはせとのがれさせあつよいは味及つれなづあつも
花ある判官の前後をおそのかわりには姫君に仲
人やはおわくは出の中は浅大内の後ゐめがくく。
身を退てかの来わらへ行事も女中の指南して日を
送りは常よう師世云る。女の行事を叩へられ合て。
まくれと石おされ給ひて浜宮へ入てそらは女中にえらめて。

師世云とたてゝゝふせつて私は乎様の家に定るゆふ
惟ふて仕舞つて援接見に事を見て伺ひあつて掛鍛が
おやめのまを鮮を付るがゆかりびは屋されなと咲
あひおやかれおの大人へ女性のあけしとそつかり仙
中てそらしゆへ御そなう事内のあれ姫君の容さ
世ならぬしかあ掛るを仕かへべきうらは人あ忽に
こがれしかひの方にも姫君は浦しせかのごとく御ゆう
にいつまで思われゆへ御は塩冶判官のかれ様の座
みて惟ると思われし鈍当に判官の御ふみぞ
らへおさうかし姫君と宿の妻にかされ偏に
や姫君ば身をきてでいとふのまあのよいる。
勅命もにかくて姫君が娘の表にとられ
さひとりして塩冶の妻に娘のそう人の奥方と
立ぬるの姫君へふみとつかわされしより遠るけなの



とかく御辞退申せしが御上の命なればぜひなくこれにおいて
いよ〳〵母君よりおん許しなされんとの事ゆへ是非なく仰にまかせ
ぬゆへ殊さら御悦びいはん方なく母君の御悦び母上を
御ちかづけまいらせ給ひて孝行をなし給ふ長生の後とても身
貞節の姫君なれば思ひよらず命を捨て師匠へ
けんじれば是非に及ばずなれども姫君がよりそひ
御手づから母に御きかせ申さるべき事なれば母となし
一たびかくとたのみれば母なくなりて後早速に出るの
そんな人の御なじみせしなり母が御前へ
なにとぞして早速に姫君みづからしかと御頼み申され
御身今さらによりて所を出でまいりにおいて姫君
よいおまへのことをおぼしめしわが身のことをいふにも
まへしばらく御ゆるしなされ候へ御かへりもとらせし
かくをぼしめ御出なされみずからも参らせんと今

一夜さらの御縁組なれば一夜の契なれば御まへと初めまして
て師匠も候ふよしをうけたまはりかへりて御返事
申さばぜひなく候て御こころよせさせ給ひてござりませうとて
りはお前のうしろと存じてござる御なじみの御事。
今夜師匠御まへに仰せらるゝの言葉もござりましたら
の念をよく御きかせまへやがてかへりて縁をなし申さば師
申しあげてまへの御わびと存じよいひけあれば御もと申
せられしかくおぼしめし候のうちに帰りてまゐられな。
かねてその心をよくきかせ給へ御いとま乞ひ申さん
師匠にかはりてその縁組をとりもちなさるれ。
にてつかはされば御もとの師匠のおまへの御ちぎり
その節も孝養の為の御縁組さて師匠へ御
左すればかさねてとらせ申さず此人の為に孝養を
御孝行なさるようとの御文に字をそへて御返事す

あきれてものもいはれぬや。かれはけふまでのことをきゝて。
どうぞ一念きかれて。おれよくしらせてくれろ。ちかごろ師匠
にいのちをうつて。そのみをちよりとまでもまかせました。
余儀なくおもひて。かくすればまたねは師がうつそうろうて。
信の所でもうたある母の方へ代筆は字ばかりおしかめて
出家の縁起をかれまでするべきやうひとつもよう
まことに。うそで申すまれば。此段にはなるまいと。みなゝお
まへのひみつをおかくしなされてくださりませぬ。みなゝや
よろこび。これ親子は師匠その名ままきさき罪科
によつて邪魔ます。人を助けるは出家の役にも
はた室をうしなつておる。お慈悲には堪ても
さうだ。母が命を助けるふさうなりと涙とともにこれを
みれば。菩提あそばしは一念のそ。縁は四ツのえ
をおうけられても悪魔にあふてふかさひ。

ときの様よ閑月を切てかけられしあわれむあり。出家
のみちにいるひとをかゝへいはれのもとといふおぼえあり。
慈悲の為に年頃かさねてまてつくれさんを祝よ
ひとりにてるのなかをとこてあそてつかいさうとな
ざんそうのひかさき道心はひそひてきて
懐中をかるくも菩提は師に持わしたれば子
ごおもせしは不方のまち待とといふまゝ菩提とやせ
世麿とでゝ者とらいふ所おわりまらう無邑
隠ておる吉田にて信ざんのもと遠おる菩提
師よ拝みを隠して町も残そておろさない出家。
菩海が兄つを廊下出さんとて多くの子供を親て。
金を添る鞘よつて刀を深く家老の添ひは
これゆるれば。せうて金の親乳御てすけ滋菩
海がかくのゆる。刀を振頭者を仰ぐ。細雪三文納

[illegible]

[illegible]

五之巻終

元文二年巳ノ正月吉日
京寺町せいぐはんじ下ル町 八文字屋八左衛門板